



一般社団法人 大日本武徳会

会報 武徳

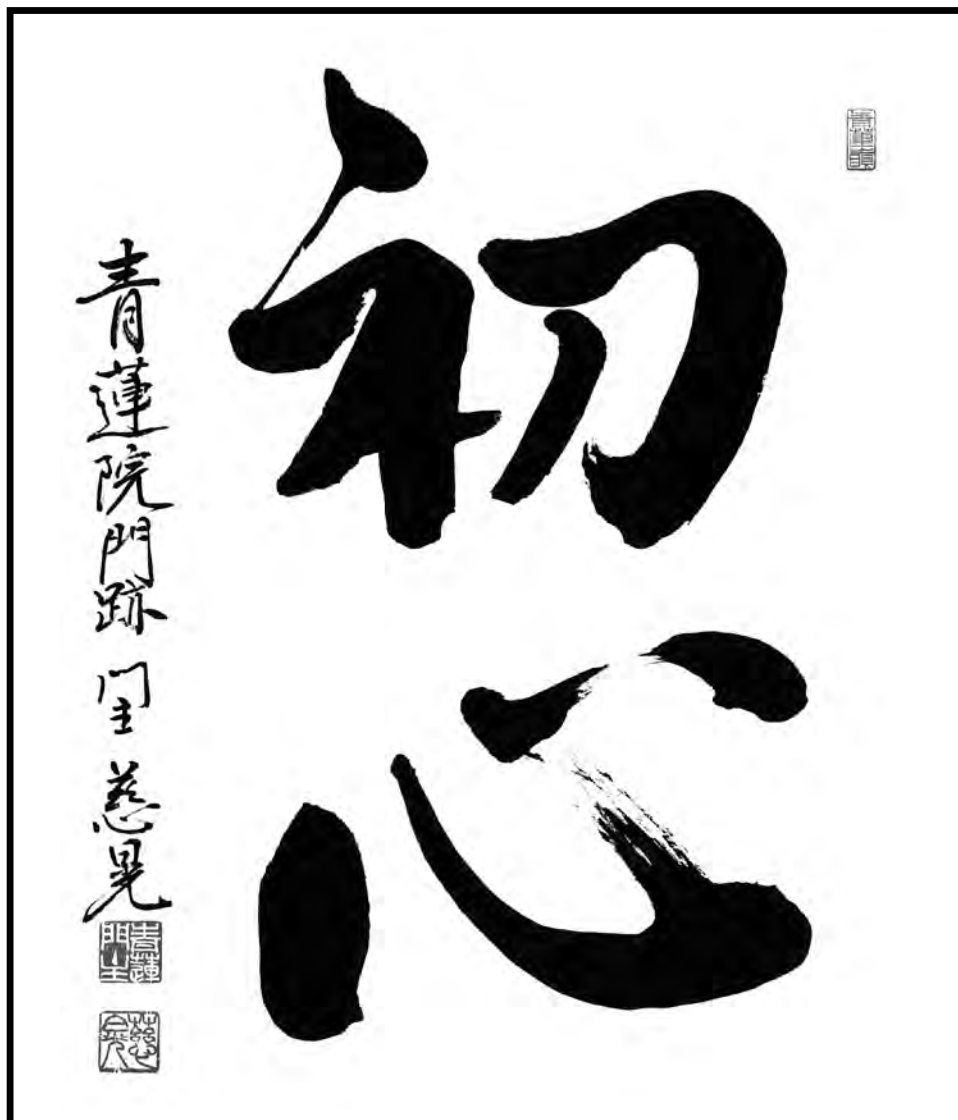
2020.10 秋季号



大日本武徳会本部正門
大日本武徳会武道専門学校正門（明治44年）



一般社団法人 大日本武徳会



一般社団法人

大日本武徳会

役員名簿

監事	監事	理事	理事	理事	理事	理事	副総裁兼理事	代表理事
高島	藤井	中田	上村	渡邊	山本	竹田	桑原	濱田
幸	正巳	浩大	雅彦	佳代子	楠城	豊	兵充	鉄心

武種別・武道執行専門委員名簿（順不同）

村川	松山	北滝	小成	榊井	東長	中中	平柳	落桶	市藤	山桑	濱	居合道
上崎	本田	川山	林田	田本	出田	森田	林田	合田	村井	本	田	
竹秀	文		信	正敏	廣順	茂浩	裕邦	春正		正楠	武兵	
亨藏	邦典	茂昭	之守	博弘	志一	範大	蔵治	彦信	章巳	城太	充心	

居合道

橋坂	松本	長谷川	木下	加藤	杉生	小松	安藤	西村	渡邊	高木	平松	伊藤	戸田	山田	檜野	渡邊	菓子	木下	森内	山本	村田	石本
本口	本	川	賢	敏	秀	藤	竹	祥	宏	松	則	夫	學	樹	輝	正	子	恵	子	藏	勇	人
孝直	和	安	司	夫	祐	敏	肇	生	正	造	男	夫	學	樹	輝	正	子	恵	子	藏	勇	人
生美	清	輝	司	夫	祐	敏	肇	生	正	造	男	夫	學	樹	輝	正	子	恵	子	藏	勇	人

上村	藤井	村山	二又	早坂	川村	平野	永井	宮園	北川	北野	木下	太田	長田	中森	中田	杉野	竹田	中田	濱田	桑原		樋口
雅正	盛	静	義	忠	秀	節	國	隆	公	淳	順	茂	浩	至	寛	豊	太	心	充			友
彦巳	哲	明	文	義	雄	哉	男	茂	雄	子	一	一	範	大	寛	豊	太	心	充			視

古武道

大沼	上村	齋木	道觀	桑原	濱田		高島	北野	竹田	濱田	桑原		杉生	安達	落合	長田	中森	市村	深野	中田	濱田
沼雅	村雅	木泰	世宗	兵充	鉄心		島伸	野隆	田豊	鉄心	兵充		生	達	合	順	茂	良	武	鉄	心
彦彦	彦彦	徳	慶	充	心		幸	雄	豊	心	充		祐	純	彦	一	範	章	興	太	心

空手道

柔術

剣道

高島	北野	濱田	桑原		桑原	濱田		佐藤	中西	松尾	坂本	藤本	安藤	松村	中田	森内	荒木	花元
伸幸	隆雄	鉄心	兵充		兵充	鉄心		哲治	智美	一	俊	准	貞	哲	忠	天一	博	浄

柔道

合気道

挑み続ける大日本武徳会

濱田 鉄心

本年度は新型コロナウイルス感染拡大の為、本会会員の安全と健康を最大限考慮して恒例の主催・協賛大会事業は全て延期、もしくは中止となりました。世界中で爆発的なパンデミックになり未だに収束の兆しは見えず、国内外で多くの研究機関が日夜必死で努力しているにもかかわらず、決定的な治療薬も有効なワクチンの開発も相当な期間が必要とされることから、社会全体が悲観的な風潮になりがちですが、人類の存続が脅かされる共通の敵に対して今こそ地球レベルで真剣に対処して行かねばならない時代に突入していると考えます。こういう厳しい時期においても本会は、この状況にひるむことなく未来志向で前進していかねばなりません。

年度末まで残された期間をフルに活用し、新型コロナウイルスの収束状況によつて来年度、再来年度の事業計画を綿密に計画して参ります。これらの企画事は当会理事会において十分に討議した上で判断し、本会の総合的な発展に寄与できるように一層の努力を致します。

第六回世界武徳祭は二〇二一年の春に延期としておりますが、公衆衛生上の問題で諸般の必要条件が国際的に満たされない場合はやむを得ず二〇二二年の春に再度延期されることも考えられます。参加者の健康と安全が十分に確保されている事が必要条件ですので、必然的にそのハードルは高くなります。その判断は本年度十二月までに決定し、会員の皆様と関係各位にはその旨お知らせいたします。どのような状況にあつても忍耐強く行動し、我々はいずれ必ず初志を貫徹いたします所存です。挑むことは即ち自らの努力で自らの運命を切り開いていくことでもありますから、本会は躊躇することなく、初心を忘れず着実に前進して参ります。

しかしながら現状において、三密を避け、距離感を保ち、マスクを着用し衛生上の基本条件を維持しながら武道稽古を実施する事は、新しいチャレンジです。

国際部においても日々の通常の稽古が不可能であることから、リモート訓練を実施しております。ズーム形式の会議システムなどを活用し、参加者のPCやスマホなどに連携させて画面上で間接的に講習や稽古を実施する事で、多くの参加者が隔離された状態でも最小限度の心身の鍛錬には役立つものと思われれます。この方法には、その有効性の結果においては是非がありますが、どのような状況においても屈しないという事に関しては、大きな役割を果たしています。

さらに本会の重要な出版事業である本年度秋号会報、来年度春号会報はレトロ特集号として多くの先達の先生方が過去に寄稿された記事を主体にして編集いたしました。昭和二十八年に大野熊雄理事長を筆頭にして再スタートを切った大日本武徳会には、日本を代表する多くの著名な武道の先生方がおられました。その当時の先生方から武徳会報の記事を会報編集委員会の竹田委員長と編集委員が抜粋し、本会の過去と現在、未来を重要な顕彰の視点と捉えて再度会員の皆様にご紹介することになりました。その歴史的な文献を通じて





本会の会員の皆様にとって、本会の初心を模索する上で参考になれば幸いです。そういう意味で今回は、東伏見総裁祝下に初心という書を書いていただき、今期秋号会報の主たる出版の根幹と致します。

現状は大変厳しい不確定な世相ではありますが、会員の皆様と共に、さらなる大日本武徳会の未来的発展の為に挑む所存でございますので、これからも精力的なご協力とご尽力を賜りますよう心から切にお願い申し上げます。さらに末尾に東伏見慈晃総裁、桑原兵充副総裁を始めとする本会会員の皆様と関係各位には厚くお礼申し上げます。

レトロ 特集号



現代武道と伝統古武道について

心月無想柳流十一代宗家

範士 加納 鍊 岳 (兵庫県)

昨今行なわれている現代武道について巷間種々の批判があるようですが、私なりに考えると、礼に始まり礼に終ると云う、日本人本来の姿が薄らぎ、只ゲーム勝負のみにこだわった、武道と云うよりもむしろ競技を行なうと云う感をもうけるような武道試合を再三、再四見て参りましたが、およそ日本武道とかけ離れた感を禁じ得ないのであります。

扨て我々が云う武道とは、一千有余年にさかのぼり伝統と掟によつて、連綿と現代まで保存継承されて来た各流派に於て、武芸十八般を総合的に錬磨修練し、技と掟を行なう事を武術・武道と云い、然も大きく分けて古き時代に於ては各藩のお止め武術としてこの指南に当り、又は野にありて集落生活を営む村落に於て、集団防備を目的とした武道武芸として発達

してきた二筋の流れがあるように思われます。このような流れの伝統武道が現代尚、調査済みの分だけを見ましても二六〇派以上にのぼっておりま。これを現代と古代に分けて、我々はこれを総称して古武道と云う。

尚、この古武道には二つに大別できる技があり、一は殺法、二は活法で、一については、目的・主義の為に相手を倒す全くの格闘技であり、二は全く異なる人間本来の体質上の利点を活かし、身体に損傷をきたした場合、速やかにこれに修復手当を施し、回復せしめる技を活法と云う。

これは武術と云う分野の中で車の両輪であつて、いずれも軽んずる事はできない事である。しかもこの修業については十年、二十年の歳月を費しても、仲々習得困難と云う処に修業者はそれこそ血の

出るような努力を行なうものである。従つて日本の武道・武術とはその地方、環境によつて異なり、自然条件を加味し、その時代の諸条件を合理的に充し考え、あみだされた一つの武道タイプを何々流と称し、これを連綿と受け継ぐものであります。

然もこの継承に当り、最高責任者である宗家制度を行ない、門下よりこの流派の皆伝者に限り師範を允許し、広く門人の育成をなし流派の保存と発展に努めてきたものである。従つて何々流を名乗る武芸者に於ては、他の流派を公開演武の場に於て見ているとか、又はハミリで撮影しそれを真似るとか、そのような外面的な型だけではなく、古流の武術とはその流派毎に、口伝による極秘技を習得しなければ単なる踊りであつて古流武術とは申せません。従つて何々流と云う古流の流派を名乗る者は宗家または師範允許を受けた、師よりの直伝でなければならぬ。しかも宗家師範またはこれを代行する師範代に於ては、その流派の術および人格的に最高権威者でなければならぬ。

このような組織により、武芸十八般の内の古流泳法を行なう場合未熟者に於て水に溺るるが如き事があれば、直ちに蘇生法（現代風に云えば人工呼吸）を、また殺法を行なう場合、当身等により一時気を失なわさしめ（落とし）術を行ない、のち蘇生せしめる（活を入れる）等の、活殺自在の技を行なわなければならない。一口に云いますと、日本武道とは柔よく剛を制すると云う事が真随であります。大兵と小兵が試合を行なう場合、技によつてまさかと思われるような結果が得られる。即ち、雲つく大男をその半分にも充たない小男が、ズッテンドウと倒す処に日本武道の誇りがあります。

現代スポーツまたは競技一遍当のスポーツ武道を、一般的には真の武道と感違いし、大方の同好者の批判、慨嘆を買い武道の真価を昔に比べ、今は日本武道も地に落ちた、と思われるのが現状であります。

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていただきます。

(昭和五十二年一月十五日発行)

「現代武道と伝統古武道について」の感想

竹田 豊

劈頭、現代武道について「礼に始まり礼に終わる」という日本人本来の姿が薄らぎゲーム勝負にこだわった武道の試合を度々見ている。およそ日本武道とかけ離れた感を禁じ得ないと厳しく指摘、と同時に伝統古武道の運用方法が記載されています。

剣術、柔術等の伝統武術は明治の世になり無用とされ衰えていき、それら剣術、柔術等を社会に適用させることを考案し形成されたのが「剣道、柔道」だといわれています。

ここでは伝統古武道、現代武道の礼節についての感想を記載致します。

現代武道の目的は、試合のルールを設けて勝者を決める。礼節についても当然強調する存在です。ではどのようなところが、慨嘆を買っているのでしょうか。具体的に言及していません。

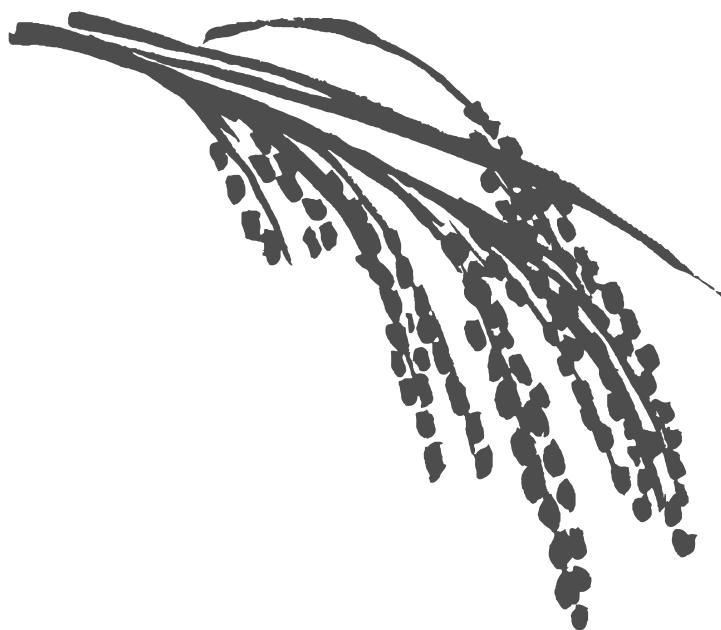
ひとつの例を挙げるとすると試合に勝った後の両手をあげてのガッツポーズ、試合場で飛び跳ねる。負けた相手に対する慈悲が無い等をいわれているのです。う。

礼に始まり礼に終わるということは、どのような場面でも言われる言葉です。武道だけでなく、スポーツ全体においても同様です。

一九六四年東京オリンピック柔道男子無差別級決勝戦において、オランダ、アントン・ヘーシンク選手が、神永昭夫選手に勝ちを収めた瞬間、喜び勇んで試合場に駆けこみそうなオランダのメンバーに対して、ヘーシンク選手は、駆けてきた彼を手で制しました。神永選手に対する態度、残心に感動しました。

社会生活の中でも礼に始まり礼に終わるは、生活管理の必要な心得と考えます。先師の記載した記事は重く受け止めなければと思います。果たして現代武道が礼節を欠くとは考えられず、そして伝統古武道も礼節は存在します。技術は勿論

のこと、礼節についても高段者の皆様が後進の良き指導者となり、ご教示頂きたいと存じます。



剣道防具の普及と其の始祖

範士 武田良一 (長崎)

上泉信綱が神陰流を唱道してより、その六世を嗣いだ山田平左衛門、名は光徳、隠退してから一風斎と号した。永井伊賀守の家臣で、剣技には充分熟して居たが、更に五世の高橋重治に指導をうけ免許皆伝となったのは十年後の四十六才の時、所謂大器晩成の型であつたが、子弟の教育には極めて厳しいものがあつた。その三男で長沼四郎左衛門名は国郷八才の頃より父の薫陶をうけ、造詣の深いことは当時これに匹敵するものがなかった。芝西久保に道場を構へて子弟を教導すること多年、神陰流の中世に鳴ったのは実にこのときである。

この時国郷は考へた。従来神陰流の撓の型は限られて居るが、之を鍛錬修業して剣術は手中に収め得るとするも、各人受性の甲乙によつて、真に必要を得るものとしては尠い。

理業を会得する一方法としては試合稽古をさせるにしくはない、それにしては烈しい打合となれば互に創痕を蒙ることが多いであらう。之は防具の必要があるとして面、籠手、撓の製作を發明した。他流では思ひもよらぬ考案に、或は非り或は驚歎したが、

この考案は時代を鑑み、意嚮を迎へての工夫であつた。秋、恰も元禄の華奢風流の深染している享保の太平時代、丁度此頃將軍吉宗が武事奨励中であつたので実地と稽古とを結び付けようとした彼の苦心は見事図に当り、頓に人氣投合して長沼の道場は一大隆盛を見て瞬く間に一万余人の門生を仕立てた。將に當時としては、偉大なりと云う可きである。それから四方八方からの撓防具による試合申込が殺到した、中でも薩藩の劍客鈴木弥藤次などは此勝負を見物して頗る感服して、自分の弟子数十人を引つれて一時に入門するという情勢であつた。

却説一般の稽古というものが規矩から成立すると云うのであるが、その規矩は実地から未だ知り及ばざる事柄に推論し新知識を得る方法を定めたものであるが、之を実地に施す事になると茲に甚しい逕庭が出て来る。譬へば碁の勝負を見ても分るように、先づ定石と称して之に拠らなければ配置結構は整はない、定石を外れた打方は、同輩間では力碁で、對手が未熟なら勝てもしようが、可なり学んだ者には自在に飄弄される。これと同様に、剣術も型を真実に学んで、運用の妙味が悟られ

る時は真剣勝負で勝を制することが出来るのであるが、此の処まで達するのは用意周到、精神が剣化しなければならぬ。碁の位で初段に至るのは素人から容易でないと同じく、剣を学んで一人前になるのも亦然りである。大方の者が碁碁となり、棒振りとなつて生涯を終るのが落である。即ち定石を学べば定石に執着し、型を学べば型に拘泥して対者の機鋒に円転滑脱することが出来ぬ。かくして十中八九が豆腐芸となつて了つては寧ろ芸術は無い方が優る、彼我共に天賦のままで押しやつても理屈は同じである、此点を慮れば頗る寒心に堪へないという処に長沼の疑惧する処があつた。特に奢侈洒落のこの時代の剣術は只武士が日課の役目と心得て月に五六度顔を出せば事と足りるとした野暮な時代であつたので、実地と稽古とを結び付けようとした彼の苦心は、遂に道具剣術の奨励となつたのである。先づ危険の分子を除いて各自学んだ手法を応用して行くならば、或は突如として發明し、剣理を悟って高手に至る者が多く出来るであらうとした事が全く図に當つたのである。然るに一利あれば一害生ずるは世の習である。試合が面白くなつて熱中すると

型を修業する者は少なくなる。剣術は互に繋ち合つて居る中に上手になる者だと心得違ひをする者もある。同じ手合の棋客が昼夜を分たず対局しても、一向昇進せぬのは、それ以上の道をたどらぬからである。試合は型の運用機関として始められたものである。今日もこれと全く同じであるが、當時も主客顛倒して撃剣これ剣法となつて了つた、希くは只今再建武徳会が唱導する剣道はこの徹を踏まざる様前車のと戒すべく始つた事を忘れてはならない。さて長沼の考案が時勢的を射て衆心を引付けたに就て、他流は始めの内こそ誹謗に口を濁したが、現状は旧格のみによつては門前雀羅を張るという状態である。

この頃長沼派とは別に小野派系にして町道場を以て盛んに一刀流を鼓吹していた中西派があつた。其の二代目中西忠蔵子武に至つて、漸く小野派の組太刀は形のみに流れて本意を失つて来ていて、正に時代の潮流は防禦具の必要にせまられて来ていた。由来一刀流は刃引を以て稽古し、位、構、長、短、間尺を量り敵刃の我に中らぬを修業し、心氣を練る工夫をするのである。然るに是が切組太刀を「操り人形」の如く「舞臺」の舞の如く型に嵌めて動くのみで、神氣の満つる事がなければ輕業師の曲芸にも及ばぬものとなる。寧ろ面袍を被て心次第に刺撃をさするが、形のほぐれとなつて、却て

得る所があるだろうと、鎧袍^{しやくとう}を發明して門人に用いさせたのが此二代中西忠藏である。新奇に走る人情は古今の差別はなく、是こそ真の剣述で、自己を禦ぎ敵に当る道理に叶へるものだ、全く長沼系の道具剣術に共鳴しこれに竹胴まで整へて急湍の進る勢を以て万延した。然し中には余りの流行の烈しさに、眉をしかめて、角を矯めて牛を殺すの謂ではないかと案じた者もあった。だがその後剣術は撓打と定った如く各派の組太刀は学ぶ者五指を以て数ふる状態となった。之を見て爾余の師範家も吾も吾もと忽にして道具剣術に交じて仕舞った。時勢とはいえ革変の速なるに驚いたと云うのである。

其後天保初年に筑後柳河藩士大石進が江戸へ出て来て、あちこちの道場破りをやってから面、籠手、垂、竹刀の剣術（撃剣）が一層普及された。大石は身長俗に七尺という大兵、竹刀も五尺三寸をして頗る重い、而して一般に行われていなかった、胴切りと突があるから江戸の剣客は殆ど失敗した。其の後天真一刀流の白井亨が大石を破って、漸く江戸の剣客の面目を保った。然るに其の当時は大石流に長い竹刀が流行したが、中には山岡流の様な短い竹刀を遣ったものもあった。而して安政三年に設置された徳川講武所は男谷信友の計により総丈曲尺にて三尺八寸より長きは相成らずと定められた、これが今日迄の規定で通されている。

かくして嘉永安政の頃は撃剣の隆盛期で、新流時代を形成した、しかし精神面が次第に遠ざかり、業に任せて技巧に過ぎたるものが多くなった。かくして明治四年廢藩置県になって同六年東京に撃剣興行なるものが起ったが、また一方には興行に反対して、真面目に教授するものも少くなかった。然し当時官憲では剣術を廃していた、殊に萩や、佐賀の乱があつてからは役人が神経を尖らかし、所によつては撃剣を稽古するものは国事犯嫌疑者と認むると云う令を出した、中にはそれを聞かずに禁固処分されたものもいた。

其後明治十年役に東京の巡查の抜刀隊が奏功してから、矢張り剣術は必要だ、鉄砲だけでは駄目であると謂って、先づ東京警視局に復活して次第に各府県の警察に及び、又学校も随意科として課した程で、日露戦争戦捷後の明治三十八年には大日本武徳会が設立される運びになり、茲に初めて日本武道奨励の基礎が成立し、従来の剣術は剣道と改称され、嘗て長沼が創案した道具剣術は正に現在に日本武道の花形として確固たる基礎を築いたのである。

※先達のは、発行当初のまま掲載させていただきます。

（昭和四十八年十一月十日発行）

「剣道防具の普及とその始祖」 （武田良一範士）を読んで

山本 楠城

武田良一範士による論稿、「剣道防具の普及とその始祖」は、形剣道（剣術）から撓（しな）い）剣道への歴史的展開を剣道防具の発案、稽古方法の歴史的変遷のみならず、その生成背景事情、武道の本質論から見た長所・短所までの確かつ詳細に掘り下げられた啓蒙的著述である。

正徳年間（一七一〇～一七一六）、事理一致の理業を修得させるには打ち込み稽古も必要として、父光徳とともに面、籠手、胸当てを考案、合わせて袋撓の使用を工夫した長沼国郷、宝暦年間（一七五〇～一七六四）、面を改良、竹胴等竹具足式の防具、竹刀を使用した中西派二刀流二代目中西忠藏子武、さらには、大石進、白井亨等先達の逸話を交えつつ、幾多の盛衰を経て今日の防具剣道の基礎が築かれたことが詳細に述べられる。

その文脈の底流には剣術・剣道の修練に於いて真の理業修得には、正しい理解に基づいた形稽古と実戦的な打ち込み稽古が必要との理念が流れる。

なかでも、「一利あれば一害生ずるは世の習い。試合が面白くなって熱中すると形を修行するものが少なくなる。剣術は互いに打ち合つて居るうちに上手になるものだ」と心得違いをするものもある。「希くば、再建武徳会が唱道する剣道はこの轍を踏まざる様・・・」との指摘は、以て肝に銘ずべきものと思われる。

総じて先生の本論稿から、現在においても、否、武道の過度の競技化、スポーツ化が懸念される現在においてこそ、大いに傾聴し、学ぶべきものが多いと思われる。

また、元来「居合と剣道は車の両輪」と言われながら、剣道と居合さらには剣道と古流剣術において、その修行者が互いに関心を持たず、あたかも異種武道のごとくなっている現状において、形稽古の本質・肝要を理解しつつ、まさに両者を学び修練することが必要かつ有益であると本論稿を読んでさらに痛感し、学ばせて戴いた次第です。

流派の教えを見直せ

範士 鈴木栄蔵

総ての技芸物事は言葉で教え、耳で聞いて判かったからと、その通り出来るものではない。物事を習得し目的を達成しようとするには段階的にそのことを考察し計画的に行動することが大切である。特にある困難な動作を体得しようとする時、まず容易な動作から始め徐々に進んでその目的の動作に近づくように努力すべきである。即ち単純な動作から複雑な動作へと計画をたて経験を積重ねて一步一步前進するところに上達が約束される。終局的な目的の前には多くの段階が存在するもので、一見すると困難で複雑なようであるがこれを段階的に整理しながら経験を積んで行くことこそ合理的であり能率的な方法である。また一つの段階を完全にふみ味なが

ら、小さな目的を体得して行くことが質的にも根強く、ゆるがない動作となつて体現されてゆくのである。

学ぶ者は素直にその基礎を修得し身につけることである。国語、英語の文法、数学、物理、化学の方程式、囲碁の定石と同じである。書道を学ぶにもまず座り方、墨の摺り方、紙ののべ方、筆の持ち方を、直筆から始めるように、剣道を学ぶにも先づ正しい姿勢、心の置場所、目のつけ方、体制のあり方、脚の運び方、竹刀の持ち方、動かし方、攻め方、防ぎ方など指導者の示す通り真面目に真剣に正しく修得することが大事である。江戸時代中期頃から近代までの教習の順序を見るとその段階はその流派の生命とする組太刀形の剣

法を基礎として、それを中心に置き、入門すると血判して師弟の宣誓し師自からその形の指導した。その流派の形体を十分体得して後、打合の竹刀剣法を許した。しかし三年間は他流試合を禁じた程である。

当時の道場訓の一つでもある教習の順序を示した言葉に守・破・離ということがある。

守るとは修行がある程度に達するまでは、その流派を固く守つて他流を学んではならないと言うことである。例えば流派の特長とする技や理念理念を学んで免許までの過程をいうのである。

破とはそれまで学んだ流派の教えを十分に体得して進んで研究的態度が強くなり次第に内容的に深く考え、固守の精神を破つて広く他流の良いところを学んで技その理念を広めてその力が出来てくる過程をいうのである。

離とは諸流に達した後は諸流を離れて心身ともに自由自在となり

その境地を極め自からの創意工夫によって新しい流派の発生も出来る状態になれることである。

守・破・離の教えは剣道の修業順序だけでなく何れの修行道にも同じであるとともに一般社会の生き方でも同様であると思う。それには真面目さ真剣さが要求される。独立独立歩の精神を養い、己れを律し積極的な態度である。安易感と他人委せ人委せではその目的と地位は達成しない。自からの自主性にある。諸兄の健闘を祈るものである。

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていただきます。

(昭和五十五年四月二十日発行)

流派の教えを見直せ 範士 鈴木 栄蔵先生 について

至誠館 藤井 正巳

鈴木師範は、武道の技能をいかにマスターするかを段階を追って丁寧に説明されています。まずは、簡単な動作から着実に始め、だんだんと複雑な動作に一步一步着実に基礎を固めつつ進めていくのです。そのやり方の例として、書道や囲碁や国語などの習得方法を具体的に示されています。まず基礎の基礎をしつかりマスターして、学ぶ者の態度にも言及し、はじめに真剣に正しく修得するのが大切と言われている。全くその通りで、難しい技にばかり気をとられて、基本がおろそかになり、結局難しい業も修得が不完全になります。そこで、まだ気付かずに難しい技のみ練習します。もっと基本にもどりその不十分なところを完全にと、むずかし業のできないところが、わかってきます。

次に鈴木師範は守、破、離、について言及されています。つまり守とは、流派の特徴とする技や理念を徹底して学ぶ事です。なかなかこれが、徹底して学びえてないのについて、他流派に気を取られて、自流派の学びがおろそかになります。また同じ流派でも、教える先生が異なると、そちらのほうが気になります。最初の守、の獲得もむずかしくなります。

つぎの破、については、他流の良いところを学んで、技その理合いを広めてその力が出てくる過程といわれます。つまり守で徹底的に自流派を学ぶと、他流派を学んでますます自流派の良さがわかり、比較することで、目のつけどころの違いもわかってきます。より深く自流派を学ぶ事が出来ます。

さらに離、については、心身ともに自由になりその境地を極め創意工夫によって、新しい流派もできるようになる。ぜひともこの境地に達したいものです。

私の師匠が守、破、離、についていわれ、最後には無心になれること、そうすれば勝手に体が動き、どんな技でも勝手にできるようになる。それには、剣心一致が必要なことは、当然だが、と言われていました。

その境地まで行くのは、まず真面目に真剣に積極的に真摯に取り組まねばと考えております。



鈴木 栄蔵 氏

「心の器」を創ろう

本部監事・剣道範士

西村 公秀 (奈良県)

「武道」という言葉を耳にした瞬間、直感的に、「チョンマゲ」時代を思い浮かべる。ドライだといわれる最近の若い人達でも、テレビや小説など、マスコミを通じてよく知られ、多かれ少なかれ興味をひいているように思われる。それだけ武道は日本人の心の中に生き血が流れているのである。その一端が第二次世界大戦に於いてもうかがわれるような気がする。

古くさい話で恐縮だが、私は剣といえは宮本武蔵、柔といえは姿三四郎が印象に残ってならない。いづれも伝説として、日本人の歴史の中に生き続けているように思われる。史実か、伝説かは私にもよく判らない。しかしそんな事はどちらでもよいのである。今、私が言わんとするのは、武道というものは、単なる小手先だけの技術者であつては駄目だという事である。宮本武蔵と佐々木小次郎の血闘を見るとき、剣術家としては、

佐々木小次郎の方が優れていたかも知れない。しかし武士道としての精神面に於いて宮本武蔵が優れてあのような結果になった。あのドラマはそうした意味の事を私たちが日本人に訴えているものと解している。

最近、武道は一つのブームを呼んでおり、小学生に至るまで、魅力的な存在となつてきているようだ。非常に嬉しい事だと思う。しかしちょっと気がかりになるのは、勝負を決するための武道であつてはならない事である。特に若い人達にありがちな「勇み足」で、技術やテクニクだけにこだわり、勝負事のみに専念したとすれば、武道は「邪道」ともなり、恐ろしい結果を招く心配がある。

武道は「戦技」としての性格から文化としての質を持つようになつたのは、だいたい近世初期と思われる。以来、さまざまな変遷を経ながらも、一貫していえる事は人間形成としての教育的性格があつたという事である。教育には理念があり、具体的には人間観、人間像として現われる。それぞれの時代や社会に於いて、教育は望ま

しい人間像を求めてきた。

武道を教育としてとらえる時、その理想とされる人間像は、一体どのようなものであろうか。古来日本人の精神性の一つの核として武士道思想があつた。そして武道の理念も武士道との関連で考えられてきた伝統がある。武士道は武士階級の一つの独立した倫理としては消えてしまった筈であるが、その香気は近代以降、現代に至る新しい道徳に受け継がれている。それは武士の倫理というより日本人の心性といつてもよいものである。

現在でも人物を評する時「彼はサムライだ」とか「古武士の風格がある」等とよくいわれ、この評はどちらかといえ、その人物の短所ではなく長所として賞賛する場合が多い。事実私達は、武士的精神や武士的気質に対して憧憬や郷愁に似たものを感じる。主君への献身のモラルは過去のものであり、あまり興味を感じないが、それでもなお武士道に於ける一個の人間としての生き方や、自覚された徳性は現代人にも共感をあたえる。

武道がめざす人間が武士道であるかどうかは問題であり、いわゆる主従のモラルとしての武士道を今さら問題にする気はない。だが私は、やはり日本人、日本文化理解のために武士的人間観を積極的に問題にしたいと思う。

戦後の教育水準に目を見張るものがある。しかし、現在の教育は何か一番大切なものが抜けているように思われ、現在の教育のあり方について悲観する人々も少なくない。一番大切なもの、それは人間性であり心ではないだろうか。もって生まれた「善」をもう一度各人の心の中に灯したいものである。その「善」を芽生えさせるためには、まずそれにふさわしい、「心の器(うつわ)」をつくり出さねばなるまい。いうは易しで実行には努力が伴う。しかし日本の将来を考える時、好むと好まざるにかかわらず、是非やらねばならない直面した課題である。

新春を迎えるにあたり、今年こそお互いが「心の器」づくりへ再出発したいと願う一人であります。

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていただきます。

(昭和五十二年一月十五日発行)

感想文

渡邊 佳代子

「武道という言葉を知り、サムライ時代を思い浮かべる」この書き出しに、衝撃を受けた。私の中では結びつかない。これは世代の違いで変わったことのひとつなのだろうか。

時代の変化を感じる事はこれだけではない。それは人物を評する時、サムライだとか古武士の風格があるとは言わなくなったことだ。約半世紀の時間の中で生活はめまぐるしく変わったことは言うまでもない。その変化は言葉や考え方も変えてしまった。戦後の教育に於いて戦争が悪いという教育が過去の悪い考えだけでなく、残さなければならぬ考え方までも否定してしまった。そして、高度成長期の変化についていくことが精一杯で残さなければならぬことがあったことを忘れて生活している。西村先生は、戦後の教育では一番大切な何かを抜けていると指摘され、その対処として心の器を育てることと述べられている。

心の器は、一日にして大きく育つものではない。現在に於いても社会生活で心の器が育っていないならば生活していく事は変わっていない。経験より知識を重視する教育が最も難しい。社会で迷惑をかけない子どもを育てる考えは、親に迷惑をかけない子どもを育てる考えに変化しつつある。そのうえ携帯電話の普及により、幼い子どもをじっとさせるために携帯電話やタブレットで動画を見せることが増えた。子どもは、画面に直接触れることで画面が変わる操作方法を覚え、嫌いな画面はスキップさせる。それは、未就学児の好き嫌いを判断する力を育てるしかし、待つことや我慢することが出来ない子ども、他人に合わせられない子どものことを育てる事となり、集団行動に混ざれないと問題視されている。この様に自分のことだけしか考えられない子どもを育てる環境が整えば、さらに心の器の小さい大人が増えてしまうだろう。

半世紀前の警鐘は活かされていただろうか。時間をかけなければ理解できない事も、年齢によっては見方が変わることもある。人生は長いようで短い。今日の自分に向き合えなければ、どんなに時間をかけても心が成長することはない。今

の一番自分の心地よい選択が、逃げた選択でないことを確認しながら、ゆつくりと心の器を大きくしていきたい。日本人は、宗教もなければ人間性も特徴が無いと思って生活している人が増えている。この現状に危機感を持たなければならぬと思う。無宗教ではなく、神話にあるように、たくさん神様に守られている歴史がある。他宗教を否定せずに有り難い、よその国の神様と感謝する気持ちを持った民族だ。その考えによって、国民性があつたのではないだろうか。愛国心というと、戦争を起こす気持ちというようにしか考えられない人もいるが、日本で生まれ育つたのなら、海外に出て帰国したときにホッとする程、日本を好きでいてほしい。そのためにも心の教育をもっと大切にできるひとりではない。



大日本武徳会と空手道

範士 山口 剛玄（東京都）

謹んで改暦の御祝辞を申し上げます。会報「武徳」の新年号発刊を心より慶びたいとします。

旧年は、大野理事長、有馬副理事長、丸山三造範士其他の先生方の御推挙を賜わり、本会の会員として認可され其の上理事の重任を仰せつかりまして恐縮に存じて居ります。

思い出しますに、私と武徳会の初めての結ばりは、昭和六年、私が立命館大学に「剛柔流唐手研究会」を創立し、昭和十一年五月に大日本武徳会に始めて、入会諮問をしましたのが始まりで、翌十二年五月にやっと柔道部の中に編入されたのであります。

唐手は、支那拳法が長い期間を通して沖縄へ伝来し、沖縄独自の「手」と称され、国を護り身を守る護身の技として、秘かに発展し、那覇手、首里手、泊手と分れて研究されて居りました。内地に於いては、唐手と呼ばれながら普及しつつありましたが、昭和十二年の武徳会登録の時に、磯貝 一、福島清三郎、田畑諸先生方の御理解のもとに、般若経の中より

色不異空。空不異色。
色即異空。空即異色。
による「空」を基とし空手道に改め登録公認されたのであります。

剛柔流開祖、宮城長順先生が武徳会で演武されて初めて空手道家としての教士号を授与されました。

その後、福島先生、牛島辰熊先生、大谷晃先生、森下勇先生、胡井剛一先生方々が中心となつて活動されて居りました。「義方会」の道場に於いて、石原莞爾先生、加藤先生の御協力を得て、唐手道の稽古をもさせて戴き、日夜柔道、唐手の厳しい修業がなされて居りました。福島先生が東亜連盟の塾を設立されてからは、海外からも多くの学生が集り、唐手道部門としても、曹寧柱、森山泰治両氏を入塾させ、私自身も事務局として唐手道の普及発展に専念したものであります。

昭和十四年五月、私は、石原將軍、福島先生の命に依り、満洲国協和会に勤務すると同時に、支那武術、中国拳法等の統一を計るべく満洲へ渡りました。そして同十五年四月に、京都義方会の主催による、紀元二千六百年記念行事として東亜武道大会が明治神宮で開催された時、私は満洲の各地より支那武術の大家、蒙古相撲の力士等を数ヶ月かかって呼び集め、その内の強豪五十数名を引率して、満洲国使節団長として来日、東亜大会に参加しました。各種の武道と共に空手道も私と曹寧柱とによる自由組手（現在の試合法の前身）を初めて公開し、当時の立命大の

空手道部、宇治田省三、打場憲造や木崎友晴、他部員による演武を行ったものであります。その東亜大会も戦争となり、第一回のみで中断された事は誠に残念な事であります。

空手道も、戦争そして敗戦の中でその普及は一時停止されましたが、戦後は各々の組織によつて再び復興され、現在は日本のみならず世界の空手道として注目され、多くの青少年によつて練磨されるようになりました。

しかし一部に於いては、空手道本来の武道としての厳肅さはなく

なり、手軽な運動としてのみ受けとられたり、また、腕力の自己表現としてのみ評価されつつある現状を見るにつけ、私は空手道が初めて武徳会に公認された頃の切なる願いを、再び伝統ある武徳会に託して、日本の武道として未永く保存され、また尊厳ある「道」として価値づけられます事を心より願望するものであります。

昭和五十一年八月、財団法人、世界武道連盟が結成されたのを機に、私は、日本の青少年が武道をして、日本人としての自覚のもとに、国際化された経済産業界の中

で、海外進出の目まぐるしい世代を迎えた現在、己に恥ない強い精神力と体力を養う為にも、武道の奨励を促進させ、正しい武道の真実を国内は勿論、海外にも普及させ、世界平和、人類安泰の実践を行いたく、年頭に祈願するものであります。

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていただきます。

（昭和五十二年一月十五日発行）

「大日本武徳会と空手道」 範士山口剛玄先生

上村 雅彦

昭和五十二年一月十五日の原稿を拝読させて頂きました。

この頃の山口先生は東京に御在住でしたが、内容は京都の立命館大学在学中当時に及んでおられます。

昭和十一年五月に入会諮問をされ翌年十二年五月に柔道部の中に編入されたと書いておられます。

以下は「日本の武道空手道」昭和五十八年十月二十日第一刷発行

発行者 加藤勝久

発行所 榊講談社

より引用させて頂きます。

「昭和十年（一九三五年）」

大日本武徳会が、嘉納治五郎師範の推薦により、「唐手術拳法」を柔道の関係部門として入会することを承諾する。

大日本武徳会が、小西康裕・上島三之助・宮城長順の三名に対し初めて「教士」の称号を授与する。

昭和十一年（一九三六年）」

宮城長順が、沖縄県の護得久朝昌保安課長に対して、唐手術拳法の名称を廃して「空手道」と改称する旨を申し入れる。

昭和十三年（一九三八年）」

大日本武徳会が、唐手術拳法の名称を「空手術」と改める。」

これら資料から歴史的に見て昭和十年から十三年頃にかけて唐手術から空手道へ、そして当時日本武道の中心的存在である「大日本武徳会」から日本の武道空手道として正式に認可を得た時期であったと見ることが出来ます。

左記文中の「義方会」道場ですが、少ない現存資料より探索し、京都市左京区の田中神社に行き着きました。

境内敷地の北側に「徳富蘇峯の碑」があります。

「徳富蘇峯先生勉學之處」と刻まれた文の中に「交柔道教士福島清三郎氏於此處建義方館道場養成國士亦可謂」と刻まれております。

本文中にも当時の柔道範士福島清三郎先生の御名前が有りますが、神社北側の京福電鉄「元田中」駅線路を更に超えた北側に福島邸を発見することが出来ました。義方会道場は福島先生宅の道路を挟んだ東側に存在していたみたいです。残念ながら現在は数件の住宅となっておりますが、この地で福島清三郎先生が道場を建てられ、当時の柔道家を中心とし牛島辰熊先生、弟子の木村政彦先生といった歴史に残る方々達も来られていました。

そして山口剛玄先生を中心に岡村光康先生、曹寧柱先生、大山倍達先生達が空手道の稽古をもされておられたとの事です。岡村先生も東山通を西に超えた御近所に住んでおられましたがおそらく義方会道場があるので近隣に来られたのだらうとの事です。私も岡村先生御自宅は記憶に御座います。

「義方会」の場所は石碑の記述とも整合しますので、間違いないと確信出来ます。

した。

陸軍軍人石原莞爾將軍が昭和十五年五月二十九日、義方会でされた講演内容が纏められ著書「最終戦争論」として出されたとのことですので日本の歴史的にも重要な地であります。

また、本文中「一部に於いて」としながら空手道が変化しつつある現状に「私は空手道が初めて武徳会に公認された頃の切なる願いを、再び伝統ある武徳会に託して、日本の武道として末永く保存され、また尊厳ある『道』として価値づけられます事を心より願望するものであります」との御言葉がまさに現在の我々に語られておられる様であり、責任を痛感致します。

そして「青少年」のこと、「正しい武道の真実」を海外にも普及させ「世界平和」「人類安泰の実践」と正に武道の役割が競技でなく精神と世界平和の実行であると教えられました。

大変貴重な山口剛玄先生の文を読ませて頂きありがとうございます。御座いました。



剣道審査会と少年剣道講習会

範士 中田大作（石川）

昨年十月二十三・二十四日の両日、大日本武徳会本部、北陸連盟共催による剣道高段者審査会並びに少年剣道講習会が、北陸地方としては始めて石川県小松市に於て実施された。このようなことは、殆んど全剣連がやっていたことで、剣道と謂へば全剣連のお家芸のように思われているのが現状の北陸である。

このような中であつて、始めての試みであるとは云うものの、どうせやるのであれば、盛大に、しかも誰からも良かった、云い方をすれば全剣連よりも大日本武徳会の方が良かったと云つて貰える会にしたかった。そんな欲望がひしひしと湧いてきた。

二ヶ月も前からPRの方法、会場の心配等に心をくだいていた私

でしたが、思うにまかせないままに当日を迎えた。

幸いに十三日当日は晴天で、屋内での講習会なので雨天でも晴天でもかまわないようなものの、遠方から来られる講師先生方のためにも、また受講生達のためにも晴天を望む気持であつた。両先生の小松到着の列車時間はあらかじめ志牟田事務局長の連絡で分つていたので北陸連盟の幹部四名で出迎えた。充分な面識は無かつたが、松山武文範士・藤原正晴範士に駅でお会いして直ぐに分つた。お元氣な両先生をお迎えしてうれしかった。

早速私の保育園内にある修童館と名付く道場へご案内する。

会の進行方法等打ち合せた後、直ちに日本剣道形の練習に入る。

高野佐三郎剣聖の許で幾年もの錬磨をされた松山先生の、自信たっぷりの細部指導に場内の空気が張りつめ充実感があふれた。白髪ではあるが、六十九才にはとても見えない先生の若さは長年の武道の賜と感じられる。そして藤原先生の活模範演技がまた人目を引く。流石、本部派遣講師先生の立派さに、受講生の充実感と活気が場内にみなぎる。二時間半に及ぶ受講生の日本剣道形は、見違える程の上達ぶりで、指導法の尊さを今更ながら痛感する。両先生も、これでは次に行う高段審査会での形は全員合格と発表され一同感激。

引続き高段審査会に入つたが、各道場助教揃ひのためか大半の合格者に審査会は終了した。

習二十四日（日）は会場を椎松小学校体育館に移して少年剣道講習会である。受講生は小学校一年生から六年生まで、私の主宰する修童館生徒が殆んどであつたが、全員をA・B両班に分け、A班は一年生から三年生迄、B班は四年生から六年生迄とし、A班は松山

先生、B班は藤原先生が担当された。

大学教授の現職にある松山先生のご指導振りは、幼き者の耳目を集める。松山先生は本職とは云うものの、教えることの要点を充分に把握されており、しかも初心者に対するご指導法には全く大人でも感じ入る。

一方、藤原先生は前記の通り四年生から六年生の指導に當つていただいたが、四年生では未だ面の着装はしていないものの、剣道に對する下地は出来ているので、彼等の心理をつかんで適確なご指導をされる。従つて、子供達も習つたことを何度も繰り返し自習する熱心さである。子供の指導方法の大切さを改めて痛感した次第である。

かくして、心のこもつた有意義な講習会は終つたのであるが、このような講習会は本部の協力を得て数多く開催されることが望ましく、また地方支部の幹部先生方にお勧めして筆を置きます。 完

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていたが、直しました。

先師の教え「北陸連盟」五十年の歩み

北陸連盟 修童館 長田 順一

本年は新型コロナウイルスの対策として、各種イベントが中止されました。武徳会でも世界武徳祭は延期になり、全国武徳祭が中止となりました。

北陸連盟も新年総会で今年度の目標を掲げ、鍛錬に励んでおりましたが、本部よりの集団稽古自粛の通達を受け三月より個々の一人稽古の指示がだされました。不測の事態にどう対応するか試されています。長い歴史の中で多くの自然災害が発生して、一瞬にして人生の岐路に立つことがあります。今回の事案は、武徳会会員の皆様方の「侍魂」が必要とされていると感じます。

昨年の「武徳」秋号に投稿させて頂いた通り、北陸連盟の良さは「武徳の和」にあります。これは、先代中田大作先生（一九〇六年～二〇〇五年）が一九七〇年に六十四歳の時に古武道道場を開設されました。師が少年時代からの五十年以上に及ぶ武道稽古、指導者として後進を育てる武道指導をへて人生に何かを残す自身が学んできた、武道の集大成のお気持ちだったと思います。

本部より送付頂いた、一九八三年新春号に中田大作先生の「剣道審査会と少年剣道講習会」との題目で投稿された記事をあらためて拝読させて頂きました。その時代の北陸地方では余り馴染みの少ない大日本武徳会の剣道審査会・講習会の開催です。松山武文範士・藤原正晴範士両先生をお迎えした時の記事でした。私も道場助教として参加し、先生方と竹刀を交えました。藤原先生の抜き胴技を鮮明に覚えています。生死を掛けた体験をされた武徳会本部の剣道はすごい一言でした。人生には良い師と巡り合う幸せがあります。

それが、私の武道人生の分岐点となりました。最初（一九九二年）の全米武徳祭に参加したのも藤原先生が理事長として参加のメンバーに入ればとの思いがあり中田先生にお願いした記憶があります。剣道・居合道ではなく中田先生が宗家を伝承されている槍術風伝流での参加です。二間槍をどう運ぶか大変苦勞しました。中田先生が県外に電車で移動できるように考案された接ぎ金具で槍長さを半分にした槍をお借りし渡米しました。

江戸から明治に移行して武徳会が出来た頃は、数多くの槍術流派がありました。江戸時代は、移動と言えば歩きが原則ですから長い槍も運べました。しかし汽車の旅ですと長柄の武具は持ち運びに苦勞し、武徳会の演武からも廃れていったものと考えます。時代の生活様式が変われば廃れるものが沢山あります。このように自分が伝えたい術技がその時代に対応して工夫し変化したものが生き残ると考えます。

もう一つは、技の伝承ですが、伝書、古文書を読んで技を覚えることは大変難しいことです。師から、敵との間合い理合など伝書では分からないことを口伝として聞き、そして実践して我が物とし初めて習得できます。そして、継続した修練を長い年月をかけて技に磨きをかけると、ある日目覚めることがあります。それが「守破離」の世界です。宮本武蔵が伝えたときれる「千日の稽古は鍛・万日の稽古を錬」との武道鍛錬の言葉があります。三十年続けることで感じる境地です。

若い方に多いように感じますが、武徳殿・平安神宮などの演武会で自分の出番だけに力をいれている方を見かけることがあります。四十年・五十年以上の修練を積んだ方々の研ぎ澄まされた所作そして、技の趣を観察することが自己鍛錬になります。良い見本もあれば悪い見本もありますが、演武会で必ず一つ学び取る気持ちが必要です。居合道演武では相手が見えない一人所作の踊りにならないことが肝要です。古武道の世界では、スポーツの世界とは違い最速時間や最高記録が全てではありません。戦いをさける所作、相手を思いやる惻隱の情がもたられています。

令和二年に発生した新型コロナウイルスの猛威は全世界に蔓延しましたが、国民性において大きく違った結果がでたようです。国に頼らず、日頃から自己を守る準備は出来ているか、人間の生きる目的が何か、大切な物は何かなどの大きな問題を投げかけたようです。

生き残る術か、生き様か色々な考え方が生まれました。大日本武徳会会員に何が求められたか、日本の武士道の精神はどこにあったかも改めて考える機会でもありました。本年のことが「大日本武徳会」会員の大きく飛躍する機会になればと考えます。皆様方一人ひとりのご努力です。来年の「世界武徳祭」が待たれます。

指導する者の心

剣道範士 三本松 紀 元 (横浜)

新春のお慶びを申し上げます。会員の皆様方に於かれましては、心清々しく希望に満ち／＼と明るい楽しさのある良い年になります事を念願し努力をして参られること、と思います。

扱この様に目出度い時ではあります。戦後三十余年の歳月は、日本人としての其の心を見失なつてしまつて居る様に思われます。

仕組まれた教育であり当然成るべくして成つたとは申し乍ら、余りにも物質本位であり、個人的に物事を考へ且つ処理をする習慣が骨髄までも染み込んでおり、周囲の事など全く意にかけないで、他人に迷惑をかける事など眼中に無いという人々の如何に多いことでしょうか。元朝参りの行き帰りでさえも、駅のホームや線路上に投げ捨てられたタバコの吸殻の山、或は路上に投げ捨てられた種々のゴミ毎日／＼清掃に励んで居られる駅員さんや、町内会の役員さん或は又ボーイスカウトの少年少女等皆一生懸命綺麗にしようと努力を重ね、協力をおしめない人々の居られる反面、掃いても清めても追いつかない程ゴミの山にして行く

大人の多い社会は一体どうなつていふのでしょうか、その心は既に公德心や社会秩序を維持する心を忘却して居り、心身共に健全な子供を育てる資格を自ら放棄したとも言えるのではないのでしょうか。

この様な大人の社会を子供等は非常に敏感に受け止めて居ります。子供等は大人の真似を速刻言動に表現し、子供として成してはならない事を平気で実施するようになります。師を師とも思はない、親を親とも思はないで同僚か後輩とでも付き合うかの如き態度をしたり、注意をしても素直に受け止めないで反抗し、挙げ句のはては法を無視し社会秩序を乱し、人を殺め平然として英雄気取りになつて居る狂人が後を断ちません。又これを補助する者迄現われるに至つては世も末と申さなければなりません。この様な時にこそ次代の日本を背負つて立つ幼少年並に青年に對しての訓育指導の重大性を痛感させられることはあります。斯る時先ず以て大人自身が、もつと身を正し日本民族として日本人であることを自覚し、心身共に健康な人間に立ち直つてこそ子供

の本当の親になり、師になり切れ

るものと考へて居ります。その故に一般社会人に対しても教育指導の充実をはかつて行かなければならない事は申す迄もありませんが、同時に幼少年並に青年層に對しては特に原点に戻つて、常に基本に忠実に反復鍛錬することを主眼とし、これが指導に當る者は自ら大変な修行を心掛けなければなりません。

古来より「子は宝」とか「子は鏡」とか申されて居りますが、宝と云われる価値ある玉も磨かない前は只の石ころにしかすぎません、努力をして磨き上げてこそ光り輝きを増して一層奥ゆかしさと値打が発揮されて来るものであります。

その光を出す為にはどうして磨くのが一番良い方法なのか、又何の様にしたら磨こうと云う意欲を湧き立たせる事が出来るのか誘導し助言し指導をして行く必要があり、それを出来るのが良き指導者であり良き大人であると云える筈であります。

又先に述べました様に子供には大人の心や姿が即伝わり、特に悪い面は、良い事の実行には時間を要しますとの反対に速刻伝わつてしまふので非常な注意が肝要になつて参ります。従つて指導者は常に心身共に鏡の様に清く美しく澄んで居なければならぬものであります。鏡は何時如何様な時でも、常に有りの儘の姿をそこに写し出します。

若し鏡自体にゆがみがある時は予想以上に無残な姿となつて写し出されるであります。又平な鏡の前に立つ時は、その身健康であれば目の光り活々として輝き、肌の色艶も潑刺として正気に満ち満ちて居ります。反面不健康な時は、目はドンヨリと光を失ひ肌は荒れ色艶は失せ、見るからに元氣のない姿となつて写し出されるものです。

又心に疾しい事があつたり、良心に恥じる様な行爲があつたり考へたりして居る時には、落着きが無く目はオド／＼としてウツロな不安動揺の様相が写し出されます。この様に鏡は自分の心身の状態を正確に診断を下してくれるものであります。毎朝起床したならば先ず鏡の前に立つて自らの心身の健康状態を見定めた上で、反省と研鑽修行の資とし度いものです。

扱この鏡の様な心を持った子供に接する指導者はその一言一句、一挙手一投足に至る迄全ておろそかに考へてはなりません、それこそ本當に神の修行と同じ心で常に身を以て手本を示して行かなければなりません、決して楽な事ではありません、何事も研鑽と練磨の苦しい修行の連続であり、反復の繰返しの上に立つて一歩一歩と完成に近づいて参る努力が大切と信じて居ります。こうした心構で武道を通じて子供等をより一層強健な身体に鍛え上げ、何んな悪にも断固として負

けない強く正しい心と、又どんな苦境に遭遇しても、常に明るく素直で七転八起の忍耐力を失わぬ心を養ひ、国を愛し親や師を敬い感謝と報恩の念を強く堅持し、正しい礼節を身に修め、其の武徳を理解せしめそれが実践可能な立派な社会人に育て上げる義務があるものと考えて居ります。



※先達原稿は、発行当初のまま掲載させていただきます。

(昭和五十三年一月十日 発行)

指導する者の心を拝読して

日本古武道武公館 範士 木下 公子

昭和五十三年の武徳会会報、剣道範士、三本松紀元先生の寄稿を拝読、戦後三十余年の歳月は、日本人としての真の心を見失っているとの三本松先生の重なお言葉、その時から早や四十年余りその頃からの憂いがあるまま現在に至っていると感じています。

戦後教育では、公より個人の権利に重きが置かれて来たのは周知のとおり、公德心や社会秩序を維持することを忘れてしまっているかのようでした。

しかしながら 災害時等では沢山の人々が集い扶け合う。今回のコロナウイルス感染に際しても緊急事態宣言が発令されたが罰則なしという、日本のやり方でコロナを乗り越えようとしています。日本には道義的勧告を受け入れる文化があり、規制よりもモラルを重んじるという日本の民度の高さを表しています。

世界が驚きの目で見ていると報道されていましたが、日本独自の根付いた文化であり 到底理解できない事だと思えます。

今回の新型コロナウイルス感染問題を通じて考えることも多かったように思います。

古来より生活の中で育まれた文化、道徳、扶け合い等、物言わずとも来るべき時が来たら実行に移すという無意識の精神が根付いているという、まだまだ捨てたものではない、日本は素晴らしい、喜ばしい限りです。

特別なことではなく個人個人が日常の生活を大事に、自己管理も含め思いやり精神を忘れず、自分の本文を忘れず、今やれることを精いっぱいやる、武道の本分は精神鍛錬や技の継承等修行を通して自己を確立する事一言に尽きると思います。日本人としての自覚、誇りを持ってほしいと心から願うものです。



剣心一体

大日本武徳会常務理事

統剣道範士九段 田淵 五三郎

剣は心なり、心正しければ剣正し、即ち「剣心一体」これが日本武道の根本である。凡そ武道を志す者は剣技を磨くと同時に精神の修養を積み、心技一体の練磨が大切である。関ヶ原の合戦で西軍に味方して敗残兵となった無頼の徒武蔵は図らずも沢庵禅師に出会い禅の指導を受け、その真髓を体得した。そして武蔵は名を宮本武蔵と名乗り諸国修業の旅に出たのである。途中剣聖塚原ト伝の庵を尋ねて剣の奥技を極めて文武両道、天下無双の大剣士となった。その宮本武蔵の斗った数々の名勝負のうち特に左の二試合を記述して、武道家諸賢の研修の資に供し度いと思う。

一、塚原ト伝と宮本武蔵

突然宮本武蔵の訪問を受けた塚原ト伝は、何とか一手ご指南をと

熱望する武蔵を断り切れず、私は高令でもあり貴殿を弟子にする事は出来ないが隙があれば何時でも打ち込んで来なさい、と庵へ入れて同居させた。或る日閑が裏に向って座しているト伝の背に僅かの隙を見出した武蔵は間髪を入れず必殺剣を打込んだが、ト伝はこれを僅かに外すや咄嗟に前に吊した自在鍋の蓋で武蔵の木刀を押えていた。それを振り払って二の太刀を入れられなかった武蔵は明らかに自分の敗北を認め、そして自らの未熟を悟り、直ちに入門してト伝の教えを受けたのである。宮本武蔵程の達人が何故鍋蓋を振り払って二の太刀が入れられなかったのか、と一般人の納得出来ない処であるが、若しあの時武蔵が木刀を引こうとすればその瞬間に鍋蓋が面部に飛来してそれを打払っている間にト伝の必殺剣が武蔵の腹

部を刺突する、明らかに塚原ト伝の勝である。即ちその先の先を読んで早々と自分の敗北を認めた宮本武蔵は流石に一流の剣客である。名人塚原ト伝の指導を受けて益々技を磨いた武蔵はこの鍋蓋試合からヒントを得て後に二刀流を創始して日本武道に大いなる足跡を残したのであるが一刀を制しられた場合他の一刀で攻撃をかけて形勢逆転を図ると云う構想は実に合理的であり立派だと思いが、敢えて私見を申述べるなれば、二刀流は群斗の場合は確かに一刀より有利と思うが、一対一で斗う場合は二刀必ずしも有利とは思わない。且つて昭和の初期に西日本大会優勝者、香川県の二刀流藤本三段と、東日本大会優勝者講談社社長野間清治氏の長男、野間恒錬士六段が剣道日本一を懸けて技を競い合ったが結果は一刀入魂の野間六段が

勝ち日本一の覇者となった。そのことは別として私は一刀にしろ二刀にしろそれを使うのは一人の間であり、得物によって優秀はつけ難いと思う。

二、宮本武蔵と 佐々木小次郎の決闘

武蔵と小次郎の巖流島の決斗はこれ又有名であるが、この名勝負は只一太刀で簡単に勝負がついている。結論からいえば武蔵は勝つべくして勝ち、小次郎は負けるべくして負けたと云える。即ち孫子の兵法に敵を知り己れを知って戦えば百戦危うからず。敵を知らず己れを知らず戦えば百戦危うし。と云われる通り日本一と自慢する長太刀を背負い、燕返しと云う非凡の剣技を持つ佐々木小次郎の名は全国武道家の等しく認める処であるが、小次郎は自己の剣技を過信して剣豪武蔵の腕前を確かめ様とせず斗えば必ず勝てると自信満々であった。一方武蔵は常に長太刀を奮って全く相手を寄せ付けないこの強敵をたおすためにはどの様に斗えば良いか、と色々研究の結果、小次郎以上の長刀を用いて相手の太刀の届かぬ間合いを取って勝負に臨み相手の技を封じて勝ちを制することを決意した。然し何処を探しても小次郎の持つ

長太刀以上の長刀は見当らず遂に決斗の当日が来たので止むなく武蔵は巖流島へ向う舟中で、舟の櫓を削って小次郎の持つ長太刀より約10cm長い長木刀を作り、舟が巖流島に到着するやバツと砂浜へ飛び下り、タツタツと駆けて小次郎に迫まりバツと飛躍すると同時に長木刀を小次郎に目掛けて振り下ろした。又小次郎も同時に飛び上り武蔵を目掛けて長太刀を振り下ろしたが小次郎の太刀は武蔵の鉢巻を切ったのみで僅かに届かず、一瞬遅れたが武蔵の長木刀は小次郎の脳天を打砕いていた。斯くして宮本武蔵と佐々木小次郎の対決は簡単に武蔵の勝利で終わったのである。当時の武道家は少しでも腕に自信がつくと、自己過信から相手の腕前を充分確かめ様とせず、有名な剣客をたおすことにより、自分が有名になろうと無謀な挑戦をして不幸にも大切な生命を失う輩が多かった。佐々木小次郎もその一人であり自ら招いた結果とは云え彼の死は惜しまれてならない。宮本武蔵は常に慎重であり相手から挑戦を受けると相手の長所短所を徹底的に調査して、それに対応する作戦を立て必勝を期して敵と斗う、斗えば必ず勝ち、その一戦一戦の経験を糧として一段一段と大剣豪の道を究めて行つたのである。

る。これまで名人達人と云われる武道家は多数居るが、その中でも宮本武蔵は超一流であり、文武両道の達人は彼を於いて他に無いと思う。我等末世の武道家はこの偉大なる大先輩を心の師と仰ぎ修業に励み度いと思う。

※先達の手稿は、発行当初のまま掲載させていただきました。

(平成二年八月二十五日発行)

太刀を執って幽霊となれ

水南老人講話「宮本武蔵」

(楠正位と大日本武徳会による)

大阪府支部長 村田 雅人

宮本武蔵が本田家三宅軍兵衛嫡子二代軍兵衛に真剣勝負の極意を尋ねるに太刀をとりて相手に向いしとき自身は幽霊になるのでありこれが兵法の極意であるといわれた。その後、修業を重ね武蔵と再会した時、さて先年、幽霊になれと教えておいたがもう幽霊になれるかと問われた。そこで工夫を重ねましたところ空に帰することと思ひ致りましたと申しあげましたところ、先生、にこつと笑われ、大切なことは苦しんで覚えぬと身につかぬもの故、謎をかけておいたのであるが良く吟味できた。幽霊は空ということに相違ない。即ち、こちらが空であれば、その心が形に表われず心を知る事ができない故、相手は迷いを生じ我が勝つべき地を占めるであろう。これが空になれるという事である。唯、注意すべきは、心こそ心迷わす心なれ心に心、心許すな(沢庵宗彭 不動智神妙録) 唯、心おちつけ静にして動を待つ。武蔵は大声で、さあ！気合をかけて幽霊の正体を見届けよ、それからしばらく見つめていても先生の考えが少しも分らぬ。然るに我、打たんとすることをごとく読まれる。嗚呼！これが幽霊か、と覚えた次第である。

以上は水南老人の解説(意訳)であるが、今少し、宮本武蔵の自画像(島田美術館蔵)を元に思うところを述べる。画像を拝見するに正に宮本武蔵の幽霊そのものであるとの感を強くした。姿勢は見事、完全脱力自然体である。目付は間合の関係か遠山というより相手を射竦め金縛りにするが如く眉間から非常に強い気

を発していることが窺える。敵は動けず、又、此方は脱力しているので何処にも気を発し敵を封じる事ができるであろう。足は古流の踏縮めに当り何処にも気の力、勁を発する事ができよう。その他、身体理念に基づいて詳細な形を言及すれば枚挙に暇がない。今後の機会に譲りたい。

終りに幽霊即ち、宮本武蔵の試合情状の一例を示す。

(要旨) 軍兵衛が武蔵に試合を申し込んで座敷で待っていると武蔵出て来て言葉をかけてられた時、茫然と気後れがした。武蔵の業前は申すまでもないが、更に天性の威風が備わっていて太刀を執って向い合った時、既に気を飲まれてしまうのである。

(参考図書)

- ・水南老人講話「宮本武蔵」 堂本昭彦 石川卓馬
- ・五輪書 宮本武蔵(訳者) 神子侃
- ・太極拳(全) 王福来 地曳秀峰



古流の灯を消すな

小西重治郎成之

段氏の注に「按ずるに、禽獸草木皆天地の生ずる所なるも、天地の心たるを得ず。惟人のみ天地の心たり、故に天地の生（生じたもの）これを極貴となす」。度々引用する言葉ながら冒頭に上げ私達が此の素晴らしい人類としてこれに恥ぬものであるかを振返ってみたい。

返みて道場に在って愛する青少年の前で仁義礼智信の武徳を説き、剣の理法をもつて人間形成を説き乍ら胸の深奥にウソ寒い風が吹き過て行くのを否定できない。上は大きな団体から下は個の道場、それぞれの会員の心をつないでゆくには善美な人格が中堅にならねばならない。低劣な個人の集りで立派な団体が形づくられることは到底考えられない。また一歩退いて考えてみるに陶冶練成された人格が円満にでき上るにはやはりそれだけの境遇が具備されねばならぬ。物質的に言って衣食足りて礼節を知

るである。貪乏に追はれたる、その日、その日の生活にあくせくしては非凡な人を除いては、徳性の涵養などはなかなか至難でい

わゆる「恒産無ければ恒心無し」（孟子）というのが、一般人ではもとより「士」にも先ず常態であろう。人格の完成ということは無造作に考えている者もある様だが、例えば落ぶれて餓死に迫っても公明を欲し金品には絶対手をつれず、不義の金品でも自由にし得る地位に置かれても厘毛も私せぬという度迄は、そうそう易々と達せられるものであるまい。それすら相当な高い地位階級におかれての話である。

巷間剣道家は夢を喰え、玄米を喰えとあるは、健康上の提言として可とするも、それも衣食足りての話であった。剣道家なる故に清貧に甘んじ、清康潔白に過すことの可否は別として、私が青少年の折に学んだ高名

な剣士の例を上げれば、その剣士の晩年は、弟子の家を放浪し、その情にすがって死んだ。その遺業は今日の剣道界に大きな影響を残していることは衆知である。己れの全生涯を剣の道に惜しめない奉仕した剣士をた

え、えることもよいが、それ以上に哀惜の情を禁じ得ない。現実には此の様な剣士が多数おられること、思うが此の剣士を遇する仕組を考

えられてよいのではない。終戦後四十年、剣道界の変遷をつぶさに眺め、一剣道人として感ずるに進化の道を辿ったとはどうしても思えないのである。剣道人口何百万と称し、一方では限りなく高い人間性をうた

い、又一方では執拗な迄に低劣な勝敗、アテツコの反近代的人間の慾望を助長し、膨大にふくらみ平常の思考では押え切れないところに迄なった。スポーツに剣道を生かすことも可なりであり、それは剣道の一部門である

がこれが何よりも優先するという思考が偏見と言われる所以である。武道に於ては剣道も居合道も柔道も合気空手道其の他も皆な同一であり上下はない筈である。只剣道は其の規模に於て、膨大な広がりがあった。それは政治に於ける自民党政権の如く他の群少な政権の及ぶ所でなかった。それだけに、天上天下唯我独尊になりがちでそのひずみができて当然である。最も次元の低い古流無視がアテツコの剣道大会と最も高い所を標榜する審査会との矛盾が露呈した。心ある剣家はどれ程嘆いているかはかりしれない。

又各種の少年大会を見学するに、上位に残るチームは定着している。それは頂度オリムピックの体操選手のように徹底した訓練がほどこされ、少年にして大人顔負けの神技に近いポイント打ちの完璧さだった。生涯教育としての奨励の意味の剣道大会が、本末転倒した所に、小、中学生末端の剣道離れを助長した。特定の限られた少数の者が勝った。強いと賞讃されるが、負け

た其の他大勢は大会のそえものでしかないし、ポイント打の上手いもののエジキだった。スポーツに於て勝った負けは当然であり、それに依って涙することもあろうが負けつぷりのい、チームは弱いとしてあざ笑う大会風景をみる時、しみじみ剣道も未だと感じる次第であった。実際には踊る馬鹿よりも見る阿呆になっ

た方がどれだけ気楽かされない。各道場各団体の指導者はそれぞれに信念を以て教育に挺身している。千差万別思考する所は異なるとすれば、その勝敗の判定方法に於ても自ら差違があろう。当然審判法も考えられなくてはならないし、平常に於ける稽古指導法も改革されて然るべきである。

武徳会剣道が旧弊より脱皮し、一歩進んだ次元で指導方法論の確立こそ急務であると思う。審判は、公正であることは勿論、演者が心から納得するものでなければならぬ。今迄の三人制審判では、その専門でない限り、至難であり、技業末節に促られ、俗に言う「つられ揚げ」が多く審判の尊厳を失いつ、ある。それにもまして余りに大会が多過ぎるのである。其の点、武徳会の審判法は戦前から

ト打の上手いもののエジキだった。スポーツに於て勝った負けは当然であり、それに依って涙することもあろうが負けつぷりのい、チームは弱いとしてあざ笑う大会風景をみる時、しみじみ剣道も未だと感じる次第であった。実際には踊る馬鹿よりも見る阿呆になっ

た方がどれだけ気楽かされない。各道場各団体の指導者はそれぞれに信念を以て教育に挺身している。千差万別思考する所は異なるとすれば、その勝敗の判定方法に於ても自ら差違があろう。当然審判法も考えられなくてはならないし、平常に於ける稽古指導法も改革されて然るべきである。

武徳会剣道が旧弊より脱皮し、一歩進んだ次元で指導方法論の確立こそ急務であると思う。審判は、公正であることは勿論、演者が心から納得するものでなければならぬ。今迄の三人制審判では、その専門でない限り、至難であり、技業末節に促られ、俗に言う「つられ揚げ」が多く審判の尊厳を失いつ、ある。それにもまして余りに大会が多過ぎるのである。其の点、武徳会の審判法は戦前から

変らず大體審判員が少くてすむ。主審の権限が大きいから当然、主審としても審判法を学び研究するだろうし、それだけの稽古体験がものを言う。此の上に厳密さを求めるならば方法無きにしもあらずでこれは別の機会に述べたい。

次に段位審査であるが、二〇秒や三〇秒の判定では必ず見落しのあることは必定である、ましてや色眼鏡で見ると、実力ある者も不合格の悲哀をまぬがれない。主審は別としても他の六十代の審査員が稽古で受験者に胸を貸す位の親切と自信が無くてはならない。其の点、昨年度東京での本部審査会では全剣連では見られない和やかで親切極りなものであった。六十分の繰返し行う形の講習、三分きぎみの審査員も交じつての合同稽古、六十分、これだけやれば実力が判定できよう。此の上で不十分とあれば保留も止む得ないし、あきらめもつくというものである。

現在の竹刀道、居合道に足らないものがあると云ったらお叱りを頂くかもしれないが敢て言わせて貰えば、両者に組手、又は組太刀の

変らず大體審判員が少くてすむ。主審の権限が大きいから当然、主審としても審判法を学び研究するだろうし、それだけの稽古体験がものを言う。此の上に厳密さを求めるならば方法無きにしもあらずでこれは別の機会に述べたい。

対敵動作、即ちより真剣に近づき呼吸法や緩急、強弱の刀法、その間積り、技の修練、などを体得することがまったく必須な要件と言えると思う。日本剣道形が剣道にあっても居合道に組太刀が無いということはどうであろう。然しこの形とて各流派の寄せ集めである。古流を現代剣道につなぐ唯一の形であるにか、わらず、単なる段級審査のものでしなく、其の心を悟ろうとする、絶えざる修練には程遠い感、一入である。

過る四月二十九日、武徳祭に始めて参加し古武道を拝見したが、見こたえある形が多く、まして空手、合気、柔道、杖、棒などの組手、組太刀など素晴しかった。武徳会剣道、居合が新しく脱皮する方法として両者をつなぐ方法論の確立こそ肝要であり、そのエキスを、組太刀の中にあることを識らねばならない。過去に於て輪稽古をササラ踊りと言われたし、居合を独り舞、と迄言われて来たことをしるべきである。

いんしつな村八分であり、人権問題であろう。それを恐れて鳴かず飛ばず、誰かが何かをやるだろうから、上手く行けば便乗しようという、空気が強く、しいて探せば古い権力にへ張りついている日和見主義者。まったく不毛の地に会員を獲得することは、敵前に於て橋頭堡を作る至難さに似ていた。こうやって真理を語っても、なんの青二才とた、かれるのが落である。将はいても兵の居ない現実を認識して貰いたい。

此の武徳会の大平の夢を破る、勇気ある指導者が中樞に何人も現出して来たことは何よりも心強いことである。各支部の人材登用、信賞必罰、その英断を下せる識者である。これは武徳会のみならず、剣道界発展の為に素晴らしいことではないか。最近目立つことは、事務のスピード化、正確さである。得てしてえんの下の力持的存在だけに其の御苦労を推察する次第。

方法が即ち真剣に依る又木刀に依る組太刀であることを祖師より伝えられた。花には生花と造花がある。武徳会は生花でなければならぬ。桜花のそのの如くに。

世阿弥の「花伝書」に
時分の花、声の花、幽玄の花、かよう條々は、人の目にも見えなれども、そのわざより出で来る花なれば、咲く花の如くなれば、又やがて散る時分あり——真の花は咲く道理も、散る道理も人のまゝなるべし。さては久しかるべし。——年来稽古の條々、物真似の品々を能く心中に当て、分ち覚えて、能を盡し、工夫を極めて後、此の花の失せぬ所をば知るべし。此物数を極むる心、則ち花の種なるべし。されば花を知らんと思わば先ず種を知るべし。花は心、種は態なるべし。

武徳会剣道もかくありてこそ十年の修業を五年にてなし得るものと信ずる。

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていただきました。

（昭和六十一年十月十五日発行）

「古流の灯を消すな」を読んで
礼節について

貫心流 松本 秀邦

今年新型コロナウィルスが発生し私たち居合術他武道世界もすくなく影響を受けた三つの密、密閉、密集、密接とあまり居合術には関係ないと思うが、剣術等は大きな声を出すから飛沫が飛ぶ。貫心流は独自の道場は持たないから、松江工業高校の剣道場を借りて練習しており、稽古を三月から六月は休会にしている。自宅にて筋力トレーニングをする程度である。私は二十三歳から居合術をやり、学生時代、剛柔流空手道は密接が付き物との意識であつた。

古流は身体から離れず、特に武道、古流は密接、「礼節」は頭から離れない。先ず道場に入る前に「お願いします」退場するとする時は「ありがとうございます」始めと終わりは常に礼節である。

また、早く来た人がカギを開け、着替えのゴザを敷き、さらに来た人、事務局長らが道場のモップをかけである。

日本古武道協会にも加入しており、今年は二月二日東京武道館（東京都足立区）で開催、六名が参加した。この大会は隔年であり、次は三年後である。

文武両道は明治、大正、昭和、平成と激動を乗り越え、令和の今日まで、社会の将来を常に明るく切り開いて進めてきた。

公共の精神や武徳心、伝統や文化の尊重が謳われて久しい。

文部科学省が学習指導要領を改訂し、平成二十四年全国一万余を中学校一年生、二年生において武道の必修化が実施された。

「正義、勇気、根気、克己、礼節」努力など精神を養う人間形成の導くとして現代武道が継承され、日本が日本人らしくあるために、また武道文化発展の為に心に根ざした古武道の普及、継承は今後、ますます必要であると確信するところであります。

終わりに一層の大日本武徳会の発展を祈り愚寄稿とします。

所謂「劍禪一如」について

大日本武徳会

剣道錬士五段

亀田 壽夫

(一) 古来、剣と禪とは同じものであるという。大学生の頃に剣道と初めて三十年余、数年前仏教系の大学で印度哲学やサンスクリット等と聴講し、剣と禪とが如何に合致するかと思案した。

その結果まとめたのが「所謂「劍禪一如」について」なる一文である。

一般に剣術家には無筆の者が多く、伝書の類は多く僧侶や儒者の代筆になるものが多い。

「武あるもの文なかるべからず。文あるもの武なかるべからず」といわれる所以である。

剣術家自身の書いた代表的なものといえは宮本武蔵の「五輪書」がある。

尤も柳生宗矩の禪七分の剣三分に対し、武蔵は剣七分の禪三分では済まされぬ。

両者を比較すると、「二人家の風格が浮き出るといわれる。

あとは平山行蔵の「剣説」がある。行蔵は一生独身で書物と刀剣の間に埋もれていたという。

「海防問答」など著作五〇〇巻といわれ、また「剣説」という著述もあるが、そこには「大に剣術とは敵を殺伐する事也」と実に簡明に剣の道と喝破している。

「当流剣術は敵の撃剣に拘らず、この五体を似て敵の胸を突いて背後に抜遣る心にて踏込む。此の如くならざれば真実の勝負は仲々存じ寄らぬこと也(剣説)」とある。

本来、剣者は心身一如の行動が出来なければ、首と胸はたちまち処を異にする。

事は甚だ現実的である。ただ觀念的に心身一如を語っているだけでは済まされぬ。

そうしたギリギリの処で思案したものが、所謂「劍禪一如」というものであったように思う。

そもそも戦場にあつては「槍も刀もただ、棒の如く敵を叩き倒すのみ(物損徳)」で、身体ごと当るだけのものだったであらう。

「太刀は切り良いように持てばよい。青眼だ、上段だと固定した構えに拘泥するのは、居付くというものだ。」

「いずれの構えなりとも構えろと思わず、斬る事なりと思ふべし(宮本武蔵「五輪書」)」

「構えは有りて無しという理由は、いずれにしても敵を斬るという心なり(同)」

武蔵の構えの「有つて無し」というのは、決して未熟者の言う言葉ではない(大森曹玄)。

(二) 尤も「物事に付き拍手はあるものなれど、取分け兵法の拍子、鍛錬なくては及びがたき処なり(武蔵)」

武蔵は「先には懸の先、待の先、体々の先がある」といつている。

懸は仕懸けて先手を取る事、待は所謂後の先で、体は俗にいう相打である。

「三つの先といふこと、一つは我が方より掛る懸の先を言也。亦一つは敵より掛かる、これは後の先と言也。また一つは我も敵も掛り合う時の先、体々の先という(同)」

因みに、先とは分別以前の世界からじきに現われるものという。柳生三藏には「三の数」の勝ちという新機軸がある。

①敵が動き、②それを受けて同

時に我れから動らき、③斬り返す。いわば、この「三の数」は受けて勝つ「所謂後の先の太刀である。」

「小野流は剣術なれど、柳生流は兵法也(徳川家康)」

大の剣法は「太刀の徳で、世を治める事」で治國太平の剣法である。

だが、一面技巧に流れ後の世の低調の原因になったことも否めない(大森曹玄)。

(三) 「自ずから映ればうつる、映るとは月も思はず水も思はず(上泉伊勢守)」

「月無心にして水に移り、水無心にして月を写す(二刀斎法書)」

柳生新影流では「未だ動作に現わさず、只心の内に思ひ定めし其利那、恰も月の影を移すの速かなるが如く、直ちに我が心に敵の心即ち影を映して之に對して勝ちを制す」という。

尤も、無心にして對者の想を写し取る「水月移写」は、心境の練度が十分でなければ出来ぬともいう。

「活発自在にして物に滞らず、坐せんと要せば候ち坐し、「行かんと要せば候ち行く」

光と影の關係で間髪を容れない処の石火の機で、正受即応しなければ身首が処を異にする。

それは次の瞬間に相手の変化に相應するため、少しの滞滞も許されない。

些さかの着する処も残さない正受でなければならぬ。

(四) 「國師三喚」という禪の公案がある。慧忠國師三たび侍者を喚ぶ、侍者三たび応諾す。

國師曰く「將におもえり吾れ汝にそむくと元來却つて是れ汝の吾れにそむく(無門問、第一七則)。

六祖晩年の弟子といわれる慧忠國師が三度続けて侍者必與と呼ばれた。

侍者もまたその度に素直に返事をした。そこで國師は「私がお前にそむいておもうと思つていたら、何んだお前の方が私にそむいていんだな」と言われた。

これは一体何んのことか、というのがこの公案の内容である。

これが分らなければ別の挿話がある。唐の相國裴休が大安寺を訪れた処、どの壁にも達方が描いてある。

「これは何んの図相か」「高僧の真儀なり」

そこで「達度大師が描かれてゐるのは分つてゐる。だが達度そのものは今何処に居る」と訊ねた。

寺僧はこれに對し何も答えられなかった。たまたまその寺に黃檗が居たので、相國は得たり「代つてお答え願ひたい」と、禪師に鋒先を向けてきた。

すると禪師は突然大声と張上げ「相國」と呼んだ。

相國が思わず「はい」と応諾すると「いずれの処にある」と切込んできた。

達度は兎も角、相國は今何処に居るか。巧まずしてただ「はい」と答えた。一体それは何者ぞ。

因みに禪宗ではすべて今、ここ、自己である。

相國も凡人でない。「當下に了悟す」とある(黃檗「伝心法要」)そこで國師三喚に戻る。

むろんこの場合は呼ぶ方も呼ばれる方も、日常の挨拶や会話をしている訳ではない。

「俺はただ呼んだだけで貴様など眼中にないと思つてゐたが、貴様はただ返事をしただけで、俺などまったく眼中になつたなあ」

天上天下唯我獨尊である。

ただ呼んだ、ただ応じた。だがこの「ただ」が見えたらいたしたものだ。

「何右衛門」「おう」と応ずる時脱落心身が伴つていなくてはならぬ。

手をハタと打てばハッシと声が出て候。声が思案し間を置いて出で申し候わす(沢庵禪師「不動智神妙録」)。

沢庵禪師のいう「おう」と答える心も、応真の前後を裁断した「はい」も共に禪の極致である。

この「何右衛門」と呼びかけるを「おう」と答える心を不動智と申候。諸仏の智なり。

「何右衛門」と呼ばれて「何んの用にて有らん」などと思案して後に「何んの用」などというは住地煩惱にて候(同)。

禪師はこの書を柳生宗矩に与え、この書で宗矩は「劍禪一如」を体得したといわれる。

(五) 新影流では「構太刀を皆殺人刀といひ、構えのなき所を皆活人剣と言ふ。

構太刀を残さず裁断して除き、無き所を用いるに付き、其の生ずるにより活人剣という(柳生嚴長「柳生流道眼」)

万物が一に帰するのは否定の面では、これが石舟斎の所謂殺人刀で

侍者もまたその度に素直に返事をした。そこで國師は「私がお前にそむいておもうと思つていたら、何んだお前の方が私にそむいていんだな」と言われた。

これは一体何んのことか、というのがこの公案の内容である。

これが分らなければ別の挿話がある。唐の相國裴休が大安寺を訪れた処、どの壁にも達方が描いてある。

「これは何んの図相か」「高僧の真儀なり」

そこで「達度大師が描かれてゐるのは分つてゐる。だが達度そのものは今何処に居る」と訊ねた。

寺僧はこれに對し何も答えられなかった。たまたまその寺に黃檗が居たので、相國は得たり「代つてお答え願ひたい」と、禪師に鋒先を向けてきた。

すると禪師は突然大声と張上げ「相國」と呼んだ。

相國が思わず「はい」と応諾すると「いずれの処にある」と切込んできた。

達度は兎も角、相國は今何処に居るか。巧まずしてただ「はい」と答えた。一体それは何者ぞ。

因みに禪宗ではすべて今、ここ、自己である。

相國も凡人でない。「當下に了悟す」とある(黃檗「伝心法要」)そこで國師三喚に戻る。

萬物が一に帰するのは否定の面では、これが石舟斎の所謂殺人刀で

侍者もまたその度に素直に返事をした。そこで國師は「私がお前にそむいておもうと思つていたら、何んだお前の方が私にそむいていんだな」と言われた。

これは一体何んのことか、というのがこの公案の内容である。

これが分らなければ別の挿話がある。唐の相國裴休が大安寺を訪れた処、どの壁にも達方が描いてある。

「これは何んの図相か」「高僧の真儀なり」

そこで「達度大師が描かれてゐるのは分つてゐる。だが達度そのものは今何処に居る」と訊ねた。

寺僧はこれに對し何も答えられなかった。たまたまその寺に黃檗が居たので、相國は得たり「代つてお答え願ひたい」と、禪師に鋒先を向けてきた。

すると禪師は突然大声と張上げ「相國」と呼んだ。

相國が思わず「はい」と応諾すると「いずれの処にある」と切込んできた。

達度は兎も角、相國は今何処に居るか。巧まずしてただ「はい」と答えた。一体それは何者ぞ。

因みに禪宗ではすべて今、ここ、自己である。

相國も凡人でない。「當下に了悟す」とある(黃檗「伝心法要」)そこで國師三喚に戻る。

あり、一が万物に己れを現わすのは否定で、結局あるがままに肯定する活人刀に当るであろう(大森曹玄)。

「万法は無に体するぞ兵法も、無刀の心興義なりけり(宗蔵)」

「太刀のびかりとする處に初一念を直すぐに打込むだけだ」と

「柳生流新秘抄」は教えている。全き勝ちを得たいと思うのが人間の煩惱だが、自分を全うして勝たんと思つて勝つた者は一人も居ない。

武蔵さえ晩年に「自分が勝つたのは天道に見離されたから」か、相手の未熟だった故だ」と述懐している。

(六) 猛獣は爪や牙を持つが、それらを持たない人間は刀や槍をもってそれに代えた。

刀は銃になり、現代は核兵器の時代になった。

第二次大戦で東京が焼野原になったのを、私も自分の目で見ていた。

だが、原子力の平和利用が可能のように、剣の心もまた前向きに建設的に使うことが出来る。

或る時武蔵は細川公から達度の絵を所望され、上手に描けなかった。

「わが絵をよく描かんとして、却つて拙劣なり、いまだ刀術に及ばず」とその時、門人に語つたという。

私も余技として油絵を描くが、活きた線一本引けぬでは話にならない。

武蔵は剣を学ぶことで五〇歳の頃道を体得し、それからは特別に師はつかなくとも画や書も一流のものを作成している。

「兵法の利にまかせて諸芸諸道の道となせば、万事において我が師なし(五輪書)」

剣と禅が一致することは、剣と墨が一致することであり、いうなればこれは諸芸のみならず、人生万般に通ずるであろう。

※先達のは、発行当初のまま掲載させていただきました。

(平成五年八月十五日発行)

所謂「剣禅一如」について

一心無双流居合道剣心会

総師範

山田 文典

平成五年八月、大日本武徳会会報に掲載された亀田壽夫先生の記事は、私の大切な資料として保管されているものであり、武徳「レトロ特集号」の寄稿をするにあたりもう一度熟読し、併せて私の師匠である一心無双流居合道第十一代宗家範士九段毛利友彦先生から教わった「心」の大切さを再認識いたしました。宗家は、稽古の度、正しい剣には正しい心が必要だ。まず心を正す修行からせよと、お教えを頂いたことを思い出します。

亀田先生は、剣道からみた剣の心について宮本武蔵や柳生新陰流剣術等の言葉を引用され説明されています。剣道と居合道は両輪をなすものであり「剣居一体」といわれるように居合道を修行する私たちにも極めて重要な事柄が書かれています。

特に引用者の中に「大森曹玄」という名前が出てきます。この方は、直新陰流剣術を修行された臨済宗大本山天龍寺大森曹玄老師であり、多くの著書で知られる方です。特に著書「剣と禅」は私の愛読書です。

もともと一心無双流は、天龍寺と深い関係があり、毛利宗家は、天龍寺の敷地内に住まいされ、当時、天龍寺内で居合道の稽古が行われておりました。以前、天龍寺を訪問した際、昭和四十年中頃に流派一門のほか、修行僧(雲水)、大学の居合道部学生が稽古していたと宗務総長様から説明を受けました。

一心無双流の「二心」とは何にも負けない正しく強い心を言います。修行僧に「一心」と問うと間髪入れず「無双」とお答え頂きます。流派の根源の意味は、禅の教えと相通することから「居合道は、動く禅である」と入門者に伝えていきます。

居合道は、仮想敵を相手に形を修練します。当流派では、形の他に試斬の稽古、そして宗家から伝授された組居合を修練しています。特に組居合は、初心者には理解しづらい間合いや文中にあります「三つの先」など剣術の理合を学ぶことができます。

禅の世界では、禅問答があります。修行僧が、禅の修行をする中で老師から出された「公案」について必死に答えを出そうと取り組むことです。武道も同様に初心者から高段者、師範に至るまで自分に課せた課題があります。その課題を克服させるため修行を続けているわけです。そこに到達したときには言葉に言い表せることが出来ないほどの感動を生みます。組居合は、実際に相手がいるだけに仮想敵が見える利点があり、いわゆる「気づき」を生む効果が高いものです。

宗家は他界され、現在、私が総師範として流派一門を率いる立場に立ち、今更ながら宗家が晩年、「修行する上で、もし疑問が生じれば、実戦を想定して結論をだせ」とお教えを受けたことが思い出されます。私もまだまだ未熟者と考えます。指導しながらも多くの「気づき」があります。「剣禅一如」を深く理解できるように修行を続けていきたいと考えております。

最後に、コロナ禍がもたらした時を原点回帰の機会に変えて頂きました一般社団法人大日本武徳会本部の先生方に御礼申し上げます。

日本人の心

— 武士道は生きている —

範士加藤 豊明 (金沢)

武士道とは、その昔、武士が常に遵奉して必ず実践すべきものとして教えられた倫理の綱領であります。しかし、それは規則として定められた成文律ではありませんでしたが、先人たちの立派な言行や祖先からうけついで人々の心の中に銘記されていた制裁でありまして、これこそ、私たち日本人の間には犯すことのできない厳粛な神の律法であつたのであります。大日本武徳会趣意書にもあります通り、わが国の立国精神の源は宏く、また深いものでありまして、近代民主主義の目的であります—平和、博愛、正義などの要素は凡て、この立国精神の目的に包含されていると述べられていますが、これこそ日本武士道の徳でありまして、立国以来幾百年もの間に、有機的発達をとり、形成されてきたものであり、倫理的には武士の綱領として遵奉されてきたものであります。

この間、仏教は武士道に対し、安心立命の志気と従容として運命の免がるべからざるに服する信念、危機に臨んで沈着不動の操、生に執着せず、死を甘んずる意気を供与したのであります。

柳生但馬は將軍家光が、剣道の奥儀を極めたのを見て、此の上は、沢庵和尚について禅を学ばれるよう、奨めたといわれていますが、禅の形式は思案であり、開悟であります。また、その理は宇宙の森羅万象の中に伏在している大秘義を覚悟し、その極意に到着した時は、能く絶対存在者を認識し得て、ついに人間と絶対存在者とを調和せしめるもの、これが禅である、と説かれています。

また、立国の当初から、日本人の間に生まれ、発達して、広く日本人の心の中に浸透してきた神道は、仏教が武士道に対して供与することができなかったものを、ゆたかに補充してきたのであります。神道では、人の性は善なりとし六根の元は神明の如く清浄なものとされており、靈魂を神の宮に祀り、鏡を人の心の表徴とし、鏡が曇らなければ、神の靈姿を映ずるとしています。自己を知るといふことは、自分の構造や形態だけでなく、自分の徳性を内省することであり、また、天地の大自然を敬愛することは祖先の靈の宿る国土を愛し、祖先を崇拝し、ひいては皇室を国民の宗家として崇

信する、いわゆる日本民族の情感的生命の二大特質ともいふべき忠君、愛国の精神を教えたのであります。

次に、儒教もまた、武士道に対して多くの影響を与えてきました。それは、むしろ神道によって培われた、日本人の寛大な武士道精神に吸収されたとも見るべきでしょう。

孔子の説く五倫の道は、日本人が、すでに本能的にこれを重んじて実践してきたことでありまして、孔子の教えはその善なる所以を明



与えました。もちろん、一部には、陽明学説は唯我独尊主義に傾いて、不合理であるとの指摘をうけました。が、武士の心に強固な確信を与え、特立の品性と平静な情操とを発達させた徳果は明らかであります。

日本武士道は、このようにして、種々な源泉から発生した多様な哲理や宗教を巧みに吸収同化して進化してきたものでありまして、世間でも稀れな人間の儀表ともいふべきものであります。

ところが、武士道とは封建時代に生まれた特別の道義律であつて、これを実践した武士たちが存在しない現代においては、武士道などあるやう筈がないと反論される人もあるでしょう。

しかし、武士道が華やかだった時代には、武士こそが日本人を代表するものでありまして、かりそめにも日本人である以上、老幼男女を問わず、皆この武士道精神を教養され、育成されてきたのであります。従いまして、たとえ、武士階級と共に、武士道という名のものはなくなつたかも知れませんが、武士道精神と申しましょうか、日本人としての心とその働きは、決して亡びるものではありません。私たちは皆、日本人である以上この日本人の心をうけついでいる筈です。私たちは父祖伝来の武士道精神をより磨き揚げ、昂揚して、これを子孫に伝えて行かねばなりません。

極端に申しますと、武勇とか、文功とか申しますような諸道の形あるものは、たとえ朽ち果てることがありましようとも、その力と光明とはいついてもこの地上につきまことはありますまい。しきしまのやまと心を人とはば

朝日に匂ふ山桜はなと歌われた日本人の心、武士道精神は、この歌のたとえの通り、吹く風と共に、たとえ、花の姿は散り失せましても、その余香は馥郁として、いついつまでも香りつづけ、人々に幸いすることでしょう。

※先達原稿は、発行当初のまま掲載させていただきます。

(昭和五十二年一月十五日発行)

【日本人の心】

― 武士道は生きてゐる ― を拝読して。

道観世宗慶

これは昭和五十二年（西暦一九七七年）一月十五日発刊の会報「武徳」新春号に、範士・加藤豊明先生が御執筆された聡明才智な内容を拝読し、浅学非才な學生が懷古して想いを馳せ、誠に僭越非礼にも茲に寄稿文をしたためさせて頂きました。

第一章『武士道の形成』。武士道は日本古来から悠久の歳月をかけ、千年樹のごとく、日本人をして日本人たらしめてきた世界に誇れる精神で、春夏秋冬、四季折々の季節変化や温暖地の風土とともに、二千年の時をかけて様々な歴史変遷とともに、育て上げられてきた日本古来の高次の精神規律にして、生活規範でもあります。武士道の本格的な形成は、源頼朝の鎌倉幕府（一一九二）による武家政治からになりますが、しかしそれまでからの日本神道（天地神明）や仏教（特に禅宗）、そして儒教（仁・義・礼・智・信）等による多大にして崇高な理念や哲学が、武士道をより熟成させ、次元を高めたと言つても過言ではないでしょう。

第二章『武士道精神（サムライスピリット）』。現代人にも受け継がれるサムライスピリットは、「無学有情」として、赤心、礼節、誠実、愚直、冷静、懸命、明朗、勇気、自律、簡素、率直、実行、惻隠、正直、開拓、碎身等々と、学力や学識なくとも立派に社会に通用する人間形成の道でもあります。そしてこれを一言で言えば『強く清らかな精神』と言えるでしょう。

第三章『武士道教育の要「智心胆」』人間は通常わずかな表面意識（生活意識）で生活していますが、その内奥には普段自分では気がつかない膨大な潜在意識層があり、心を落としそこに意識を集中させることにより、第六感がはたらき、直感力が冴え、素晴らしい智慧を湧出させることが誰にでも出来ます。そしてさらにその潜在的意識の最深部には（意識科学の専門分野でもあります）、深層潜在善意識（阿頼耶識）の存在があり、人間をして【誠を尽くして生きる】ことを願いとして、人間を、悠久の時を超えてその成長を見守り続けている意識があります。人間は本来「内外合一の命」としての存在です。武道界で伝承され続ける『外柔内剛』（音読みで、ガイジユウナイゴウ。訓読みで、そとやわらかうちつよ

し）という人格陶冶、この外柔とは「礼節・柔和・謙虚」であり、内剛とは「不動・剛健・無私」であります。武士道の思考は胸裏（心）を深め、腹で考えます。その上で智慧を胸に刻み、沸き上がらせるのです。そのためには心を誠実で日頃からよく整え、武道精進により腹を練り、胆力（胆）をよく鍛える必要があります。そして「智心胆」三位一体の武士道教育は取りも直さず、日本人を育て上げていく規範教育でもあり、伝承され続けてきたこの「智心胆」の武士道教育が、現代ほど必要とされる時代はないでしょう。そして武徳教育が日本人の心の中に広く、桜咲く風景となることを願つてやみません。

（※イラストは「武士道」執筆者・新渡戸稲造博士）



中華民国の武道界に就いて

中華民国台湾省国術会顧問 渡 辺 庸

悠久の流れ揚子江を境に、北と

南に大きく分けて、北派・南派と言う武術がある。この武道は、広大な中国大陆の歴史・文化・地域性が、その特長ある武術武器を生み、多くの流派、多数の豪傑とそのロマンを生んで来た。一九二八年に政府の方針で中国各地に点在する伝統武術を国技として統合し、教材の出版・教学・資格等の統一を計り、国民に奨励し、国術として発展させることに決め、一九三〇年教育部は体育課程の中に国術を取り入れた。

南京に中央国術館を設立し、そして国術の統一的な普及を計った。一九三六年にベルリンオリンピック大会で、中国の武術が張文広氏外八名の武術家に依って大会開始前のアトラクションとして演武し大喝采を浴びた。その後、政治の動きによって中華民国政府は台湾

に移った。

私の所属している台湾省国術会は、全島の国術を統一し、会員は四万名位、内活動会員は一万七千名位が活躍している。その他に、台北市国術会と中華民国々術会があり、台北市々民に限り、台湾省国術会又は台北市国術会に入会する事が出来る。台北市国術会の会員数は約二千名位、中華民国々術会は全世界の愛好者が多数参加している。以上三つの国術会は、ルール技術審判技術等の打合せ、会議は合同して行っており、資格講習会等も常に一緒に行い意志の疎通・統一を計っておる事。中華民国では、国術会の会員は自己の名刺に会員である事を社名と共に列記し誇りとし、社会から尊重されています。更に日本武術も中華民国に於ては非常に愛好され、政府関係では、軍隊、警察、更に民間

では中・高等学校等一般社会に浸透しております。現代我が国とは正常な国交がない為に、近年日本の諸武道団体は、永年の友、中華民国の日本武道団体を締め出してゐる現状、諸外国に於ては日本武道が盛んに行はれてゐるにもかかわらず、指導者たる日本から中華民国の日本武道団体を絶縁して居る現状であります。最近柔道は回復したものの実に慙愧にたえない次第。現在の文化交流から見た時に日本武道は、世界的に類例をみない優秀な武術であり、この武道を世界に普及さる事は重大なる意義を有する。それは日本武士道を宣揚する事にもなり、この真意が解されれば更に日本は世界の人々により良く理解され、友好関係も一層深くなる事を確信して止まぬ次第であります。

※先達原稿は、発行当初のまま掲載させていただきます。

(昭和五十六年十月二十五日発行)

「近年の中国武術界について」

又吉古武道・大阪堺守礼館館長 村山 盛哲

先達の先生方から英知を学ぶ趣旨で、「昭和五十六年秋季号」に記載された中華民国台湾省国術会顧問、渡辺 庸先生の寄稿文「中華民国の武道界に就いて」の感想文を依頼されましたので、僭越ではありますが「近年の中国武術界」について調べてみました。以下述べることは日本・中国武術界の優劣を述べるものではないことを申し添えておきます。

先述の渡辺先生も述べていますが、中国武術は悠久の歴史の中で「戦」の教練から始まったとされますが、日本を含むアジアの多くの武芸に影響を与えてきました。「武術」は元来「道徳理念」を基本に実践性を重視する「伝統武術」と、「競技武術」に分類できます。そして、以下3つの目的で区別、特徴づけています。一、表演Ⅱ演武の美しさ、二、「健身」Ⅱ健康維持、三、「実用」Ⅱ武術の実用性。また、攻守動作を主な内容とし演技性を強め、実践性を薄めた「套路」（日本武道の型に相当）があり、しかし「套路競技」については「すでに武術の本意からはなれ、武術の意義を失っている」という意見もあります。

さて、中国武術は長い歴史の中で数百種の門派・流派が生まれ、継承・発展・淘汰されて現在に至りますが、「武術」の門派・流派はそれぞれ独自の技法や奥義を持ち、継承・発展してきました。その中でも中国の有名な武術といえば、揚子江を境に北に北派（外家拳）筋骨、体力・剛力を鍛錬する（少林拳・查拳・螳螂拳・八極拳、等）と南派（内家拳）は気の養成、心身の調和などを重視し、自身の防御能力を鍛錬する（太極拳・八卦拳・形意拳など）があり、長江南には上半身を鍛錬し多様な手技を繰り出し、下半身は安定させて力強い技を放つ「南派武術」として（洪家拳・詠春拳・蔡莫拳・白鶴拳等）がある。

そして、多くの門派では武器術も伝えられ、短い武器として「剣・刀」があり、長い武器として「槍・棍」などが四大武器と呼ばれている。中国では「剣」は両刃で反りのないものを指す。良くしなる「軟剣」が主流。「刀」は片刃で反りのある物が「中国刀」である。「中国刀」は剣と比べて重量が重いため円弧を描き

叩きつけて切る動作が多い。中国武術界から観た時に日本刀を使う「剣術・剣道」は中国で言うところの「武道」とは言われていない。日本では「剣」から発展して素晴らしい「日本刀」となった歴史からその語彙には混在があり、中国語では「刀術・刀道」が正しい表記という事になる。中国で「日本刀」と混同される「苗刀」は室末時代以前の「大太刀」が起源で、「明」に対する輸出品であった経緯がある。現在の中国政府は「中国武術」の母国として武術の発展をより全面的且つ具体的に考えていて、「国民健康のための武術」と「国際宣伝のために協議を行うこと」「人材育成の為に武術教育と指導者育成の推進」を計画している。そして、日本と中国はそれぞれの立場で「武術」「武道」を普及するためにいろいろな事業を行ってきています。伝統的武術はグローバル化すればするほど形が変容し「普及」と「変容」は対立関係にあるといえます。

早稲田大学大学院・劉 暢氏著書「中国武術のグローバルゼーション」によれば、現在の中国武術界に就いて 一、悠久の歴史を持つ中国武術は一九三八年頃から日本に紹介され、馴染みのある日本武道と比較されながら受容された。（例・太極拳）二、中国武術が日本へ普及する際に直面した問題は主に、実用性のさらなる喪失と競技性の偏重があり、日本側はこの問題を解決するのに「武術」を「伝統回帰」と「技術の高度化」に分化させ平行して発展させる方法をとる。三、中国武術は将来へ繋ぐ道として、武術性は薄れるが、国外における国際化の道と「武術」の変容を最小限に抑える「国内における国際化」の道がある、と述べている。中国古来より「義を至上とし礼を以て人を持てなし、仁愛を以て世に対処し、国を守り民に尽くす」という観念を、一國至上主義の行動をする国が見受けられる昨今、「武徳という概念」が現代の武術の世界に広く浸透し形成されることを望みます。

武道家我等の使命

鉄剣道範士 田 淵 五三郎

日本武道の発祥は詳かでないが、原始時代から数千年、その間幾多の変遷を経て今日に至っている。

最初は自らが生きるために禽獣を殺し、又自分達の仲間が豊かになるため他種族を殺戮するための

武技であった。それが段々世の中が平穏になり、生活が豊かになるにつれて殺戮のための武技は次第に自らを守り、世の平和を護るた

めの武道に移行して行つた。それに伴い武士達の所持する刀槍も攻撃用から身を守る武器となり（宝蔵院流の三ヶ月槍、佐分利流の鍵槍等）、武士の魂として尊重されるようになった。

鎌倉時代の刀匠五郎正宗は後継者を撰ぶため三名の高弟に一振り宛の刀を作らせた。そして先づ一番弟子喜左衛門村正の打った刀を

検分した。流石に一点の非の打ち処のない見事な出来映えである。然しジューツと刀身に見入っていると、次第に殺氣を感じて身震いさえ覚えてくる。

続いて二番弟子団九郎正経の打った刀を検分すると、外形は非常に美しく立派に出来上っているが、肝心の魂が籠っていない。最後に、三番弟子彦四郎貞宗の刀を検分し

た。二人の作品に比して形体、趣味等いづれの点でも劣っているが、兄弟子達には到底及ばないことを自覚して欲心を持たず、無心で打った刀には邪心がなく真心が籠っていた。

検分を終えた正宗は、自分の後継者に三番弟子の彦四郎貞宗を決定して二代目五郎正宗を名乗らせ

ることにした。そしてその決定に猛烈に反抗する喜左衛門村正を川端え連れ出した正宗は、自分の刀と村正の刀を並べて刃先を川上に

向けて突立て、上方から半紙を切つて流した。紙切れは正宗の刀の手前に来ると刀を避けてスーッと

下方え流れて行つた。一方、村正の刀の手前えに來た紙切れはスーッと引寄せられるように刀に向い真

二つに切れて下え流れて行つた。正宗は毅然として村正に向い、見たか村正、刀は身を守るものであり人を斬る物ではない。このこ

き小僧に見返されてはとも我慢が出来ない。師弟の縁もこれまでと、遂に師匠の下を飛び出して仕舞つた。（後に喜左衛門村正の打った刀は妖刀村正と云われて世の中を騒がせたことは有名である。）

このように世の平和を祈念し、真心籠めて作つた刀を身に帯びて武道家は武道一筋に工夫研鑽を積み、奥儀を究めてそれぞれの流派を後世に残されたのである。

古来から名人達人と云われた人は数多くあるが、中でも天神正伝香取神道流飯篠長威斎先生、鹿島神刀流塚原卜伝先生、一刀流伊藤一刀斎先生、柳生神陰流柳生石舟斎先生、二刀流宮本武蔵先生等が特に有名である。

即ち日本武道は武道家先生の努力研鑽と、真心籠めて作られた武器と、武士及び民衆がそれを高く評価称賛して心からの声援を贈り、完成されたものである。それがやがて一般民衆の中に融け込んで日本人の心を生み出したと云える。

この偉大なる日本国民が敗戦と云う口惜しき事態を境にして、大和魂を否定するマッカーサーの占領政策と、以後の誤つた自由主義思想及び極端な左翼主義思想によ

り、人間道徳が頽廢し青少年は非行に走り、校内暴力が各地に蔓延している。然も昨春秋朝日新聞の意識調査で、貴方は日本人に生れたことに誇りを持っていますかの

問に対し、誇りを持っていると答えた者は僅かに三〇パーセント（

米国は八〇パーセント）で、誇りを持っていない者が七〇パーセントもあり、又外国から侵攻を受けた場合貴方はどうしますか、の問に對して、逃げる・降参する、と答えた者三七パーセント（米国は一〇パーセント）もあり、かつて忠

勇無双と自他共に認め世界を震撼させた日本国民が何故に戦後一転して仕舞つたのか。それは肇国以來不敗を誇つた日本国民が、敗戦と云うショックで真の日本人の心を失い、大切な愛国心を妄却した

結果であると思う。国を愛うこと今日より切なるはない。このように墮落した精神を改善し、日本人本来の心を取戻させる道は武徳精神の振興によるところ大と信ずる。今こそ武道家我等の起つ秋であり、

伝統の武徳精神により青少年の指導育成、そして更に健全な思想の確立、以つて愛国心の昂揚に全力を尽さなければならぬ。これが我等武道家の使命であり、その責任は重大である。

不肖私は右腕を戦傷で、左腕を国鉄事故で、両腕共拳上障害で上に挙げがぬ不自由な身体ではあるが、使命達成のため懸命に頑張っております。

全国武道家諸先生には、何卒武道家の使命を更に認識されて一層のご奮起をお願いする次第であります。向寒の砌り諸先生の自愛ご健斗をお祈り致します。

完

（本部常任理事）

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていただきました。

（昭和五十七年十月十五日発行）

感想文

誠正館 檉野 正

銃剣道師範 田渕 五三郎先生記述の武道家我等の使命（大日本武徳会会報・昭和五十七年十月十五日・秋季号）熟読して感想文を書いて下さいとのこと依頼を頂きました、何分にも感想文を書くのは小学生時代に書いたのを最期に今日まで書いたことはありません、田渕五三郎先生に対して失礼なことを書いてしまうのではないかと心配です。

文章は大変簡潔で起承転結もしっかりしておられ感銘を受けました。但し鎌倉時代の刀工五郎正宗の後継者を選ぶ下りに於いて一番弟子、二番弟子の記述は時代と刀工銘に於いては些か不思議に感じました。

参考までに時代、刀工銘などを下記に記載させて頂きました。

五郎正宗・作刀期間は鎌倉末期正和ころから南北朝初期の康永ころまで、作風は相州伝

一番弟子喜左衛門村正・この様に名乗る刀工は見当たりません、右衛門尉村正は濃州赤坂の生まれで後に桑名に移住、千子派の祖、作刀期間は文明ころから文亀、永正にかけてと思われる、作風は美濃伝

二番弟子団九朗正経・名鑑漏れかと思いますが、このように名乗る刀工は見当たりません。

三番弟子彦四郎貞宗・作刀期間は鎌倉末期の嘉暦、元徳ころから南北朝初期の貞和ころまでの間であつたであろうと思われる。古書の押形には嘉元から貞和までの年紀がある在銘作が載っている、相州正宗の門人となり、のちに養子となると伝わる。

私事で申し訳ございませんが、二年間刀鍛冶の所に通い勉強しましたが、残念

なことに夏場の鍛冶屋小屋の熱に負けてしまい足の裏以外、汗疹のだらけになり、断念しました。

少し理屈ばかりなすみません。

田渕先生におかれましては、戦中、戦後大変過酷な経験をされても武道に對しての並々ならない情熱を抱かれて精進されたことは、諸先輩方が苦難を乗り越え頂いたおかげで、この平和な時代の礎になられたことを私たちは決して忘れてはいけません、私どもの十八代宗家尾形郷一先生のお話で恐縮ですが、戦後古武道の稽古が出来るように武道家数名でGHQのマッカーサー元帥の元へ嘆願に行かれたと言っています、家を出る時は家族と水杯を交わしてGHQに行かれたと聞いております。

とりとめのない感想文で誠に申し訳ございません。



田渕 五三郎 氏

勝機

剣道 範士十段
居合道

三本松喜代見

鎮魂正姿真勇正気、振起発奮見觀自在、四肢神速に万事を対処、行動自在積徳至善、心身一如威儀厳然と、進退動勢活澆々地、天道常に正義の味方、水の器に随ふ如く無形有体千変万化、運剣本来水同様に、初心の者は構を学び、業の変化に錬磨の後は相手の虚実我が心鏡に打突進退好機を活かし、起

り狐疑心居付を突破粧位癖見觀に手元強くば間合を遠く強き相手は虚実を以てせかせ間は少し工夫は常に錬氣養心氣剣体、一致の秘法は全力発起勝機万業秘訣は等し、剣の極意は処世の道と共通天理三連義内に自然の勝機は日頃の錬磨熟慮は常に断行機敏。

(大日本武徳会副会長)

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていただきます。

(昭和五十五年八月二十五日 発行)



三本松喜代見範士十段 「勝機」について

北陸連盟 修童館 中田 浩大

三本松喜代見範士十段先生の「勝機」について感想を述べることに、浅学の私にとつて難題ではありましたが、述べさせて頂きます。

- 一、心を落ち着け、正々堂々と対峙する
- 二、天の道は常に我にあり、無形有体千変万化水を切る如く
- 三、初心者は構えを学び、業の変化に錬磨を重ねる
- 四、相手の技のすきを狙って打突進退の好機を見逃さず
- 五、手元が強ければ間合いを取り、強気相手には間を外す
- 六、常に心気剣体一致全力で向かえば勝機は必ず来る
- 七、剣の極意は単に剣の道だけに留まらず、処世の道も同様で日頃の錬磨熟慮の中にある

以上何度も熟読すればするほど、三本松先生の偉大さ・懐の深さを感じ得ずには、いられません。今回、大日本武徳会に名前を刻んでこられた先生方にスポットを当てた企画を通し、私自身を振り返る機会ができましたこと、大変ありがたく思っています。これからも精進してまいります。

「レトロ特集号 終了」